

2019年度 修士論文

とんぼ玉の役割と将来性に関する一考察

教育学研究科学校教育専攻教科実践コース
美術教育専修プロダクトデザインゼミナール
17GP310
小杉 奈央

指導教員 石川善朗

目次

はじめに

- 第1節 研究背景と研究目的 4
- 第2節 先行研究 5
- 第3節 研究方法 5

第1章 とんぼ玉の概要

- 第1節 とんぼ玉の定義 6
- 第2節 ガラスの誕生 7
- 第3節 とんぼ玉の技法 8

第2章 とんぼ玉の歴史

- 第1節 古代 10
- 第2節 中世 11
- 第3節 近代
 - 第1項 ヨーロッパ 12
 - 第2項 アフリカ 13
 - 第3項 日本 14
- 第4節 現代 15

第3章 とんぼ玉の役割

- 第1節 装飾品 18
- 第2節 信仰 19
- 第3節 交易 21
- 第4節 継承 23
- 第5節 記録 24

第4章 とんぼ玉の将来性

- 第1節 若者たちにとってのとんぼ玉 27
- 第2節 現代日本とんぼの現状～美術品か、部品か～ 30
- 第3節 とんぼ玉の装飾品以外の実用例 33

第4節	とんぼ玉の将来性	34
第5章	修了作品について	
第1節	過去の作品について	
第1項	ひろさ季	37
第2項	かさねはな	38
第3項	つながるつがる	39
第2節	修了作品「Emotion8」について	
第1項	概要	40
第2項	デザインに取り入れた技法・文様	41
終わりに		47
謝辞		49
参考文献		49
参考HP		50
図版		51

はじめに

第1節 研究背景と研究目的

とんぼ玉は紀元前41世紀頃メソポタミア・エジプトから制作され続けているガラス工芸の一種である。主な活用方法は装飾品の部品としての使用法であり、ガラスを材料として手作業で生み出される。とんぼ玉は「人工の宝石」として古代から現代まで、世界中で愛用されている。日本でも弥生時代からその存在が確認され、一度は技法が継承されず廃れたが、作家たちの尽力によって復活した。現在でも装飾品の主要な部品として用いられる他、その小さなガラス玉の中に作者の世界観を閉じ込め、鑑賞する作品としての役割を果たしている。

とんぼ玉の多くは装飾品の部品として制作されているが、歴史によってとんぼ玉の役割は変化、もしくは新たな役割が付与されてきた。はじめは装飾品として制作され、メソポタミア・エジプトから徐々に世界へと広がっていった。そして呪術や信仰に関わる存在となり、お守りや仏教の荘厳具として利用され、さらには黄金や宝石、奴隷と交換できる存在へと役割を変化されていった。KOBEとんぼ玉ミュージアムが主催する『とんぼ玉展覧』の主旨・内容にもとんぼ玉は「装飾する」「護符として身を守る」「交易に用いる」「鑑賞する」などさまざまな目的に用いられたと紹介している¹。筆者はさらにこれらの他に「継承」や、「記録」という役割があると考察する。認定特定非営利活動法人シャイン・オン！キッズのプログラムに「Beads of courage (ビーズ・オブ・カレッジ) ～勇気のビーズ～」は「記録」の役割を持ったとんぼ玉であると考えられている。ここでは小児がんなどの重病を患った子供たちがとんぼ玉の色や形に共通の意味を持たせ、それらを目に見える形で闘病を記録する存在としてとんぼ玉がある。

このようにとんぼ玉は時代ごとに役割を変化させ、長い歴史を紡いできた。現代のとんぼ玉の役割は主として装飾品の一つの部品としてである。しかし、日本のとんぼ玉作家は海外と違い、とんぼ玉をいち芸術品として作る者も多い。とんぼ玉の将来性に言及する作家の中では、とんぼ玉は装飾品としての道だけでなく新たな販路を切り開くべきという声や、とんぼ玉の地位を芸術品へと向上すべきという声も上がる。一子相伝の秘術だった技

¹ KOBEとんぼ玉ミュージアム <https://www.lampwork-museum.com/exhibition/18aut-tonbo.html> (最終アクセス：2020年1月14日) 企画展は2009年から開催されているが、この文章が登場するのは2014年のとんぼ玉展覧からである。

法もインターネットの発達や作家たちの努力により、とんぼ玉の知名度と作り手は増加していった。では今後、とんぼ玉の役割はどのように変化していくか。

本研究ではとんぼ玉の歴史を整理するとともに、役割を考察する。そしてとんぼ玉がこれからどのような役割を担い、展開されていくのかと言う将来性について考察する。

第2節 先行研究

CiNiiにてとんぼ玉に関する論文を検索したところ、とんぼ玉の単語が出てくる論文は少なくないが、筆者の求めるの歴史や役割に関する論文は見つからなかった。

歴史について詳しく記述されている書籍に由水常雄の『火の贈り物 ガラス 鏡 ステンドグラス とんぼ玉』、『新装版 トンボ玉』、^{たにいちたかし}谷一尚・工藤吉郎の『世界のとんぼ玉』がある。これらはとんぼ玉の古代からの歴史や、過去に作られたとんぼ玉を紹介している。

しかし、とんぼ玉の現代史についてはあまり記述されていない。とんぼ玉の現代については『きらめくビーズ：とんぼ玉代表作家作品集』とジャパンランプワークソサエティから発行されているムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA』の関連記事、クラフト誌『創作市場』にてとんぼ玉が特集された39号「とんぼ玉に遊ぶ」と44号「とんぼ玉に遊ぶ2」の作家の経歴やインタビュー内容をもとに整理する。「Beads of courage～勇気のビーズ～」に関しては認定特定非営利活動法人シャイン！オン・キッズのホームページと紹介冊子を参考とする。

第3節 研究方法

前説にて述べた書籍を購読し、情報収集をする。第1章ではとんぼ玉というものの定義を確認するとともに素材となるガラスの誕生と、とんぼ玉の技法について紹介する。第2章から第3章にかけて、歴史は大きく古代・中世・近代・現代に分けそれぞれの時代におけるとんぼ玉の役割を整理する。第4章では弘前大学学生を対象にしたとんぼ玉の認知度とイメージについてアンケート調査をするとともに、作家のインタビュー記事からとんぼ玉の将来性について考察する。第5章では自身の過去作品の役割を考察する。また、とんぼ玉を鑑賞させる際にどのような展示方法にするかという課題を踏まえ、自身の修了作品の制作と展示について述べる。

第1章 とんぼ玉の概要

第1節 とんぼ玉の定義

とんぼ玉という名称は日本でのみ使われている名称である。これを知っている日本人は少ないのではないか。また、とんぼ玉という存在自体が、日本古来から作られた伝統のものと考えている人も多いだろう。日本人の言う「とんぼ玉」は、英語圏ではGlass Beads、Lampwork² Beadsという名称で呼ばれ、中国・台湾・香港では瑠璃玉、琉璃珠、蜻蜓球、もしくは玻璃玉と呼ばれている。日本人のみが使用するとんぼ玉という名前の由来はその見た目にあるとされる。江戸時代発刊の萬金産業袋³に「トンボ玉 地は瑠璃、或は白きに赤い花の散らし紋あり」という記述がある。瑠璃あるいは白地に赤い花模様が散らされている見た目がとんぼの複眼に見えるため、日本ではこのガラス玉に「とんぼ玉」という名前が付いた。

また、由水は自らの書籍でとんぼ玉を「異なった色ガラスで模様をつけたガラス玉をいうが、特に古代玉について使われることが多い」⁴、また「色文様のついたガラスの玉で、紐を通す穴のあいた刺し玉（穴あき玉）のことである」⁵と定義している。江戸時代は「先述の瑠璃地もしくは白地に赤い花模様が散らされている見た目のガラス製の穴あき玉」がとんぼ玉の条件とされ、他の模様や形ごとに雁木玉や筋玉など、それぞれ名前をつけて区別していた。海外のとんぼ玉を見ても江戸時代ほど名称が付けられているものはない。

しかし、現在では「どのような模様や色、形であっても、手作業で作られた穴の空いたガラス製の玉」であればとんぼ玉であるとされている⁶。本論では「色・形・模様問わずガラス製であり穴が空いている玉」をとんぼ玉とし、研究を進めていく。

² ランプワーク。日本ではバーナーワークと呼ばれることが多い。ガスバーナーを用いてガラス棒やガラス管を加熱、溶解しガラス製品、作品を作成する技法。

³ 萬金産業袋：江戸時代の商品学書。享保17年（1732）三宅也来編。

⁴ 由水常雄、『火の贈り物 ガラス 鏡 ステンドグラス とんぼ玉』p.167、1977年

⁵ 由水常雄、『トンボ玉』p.6、1989年

⁶ きなりがらすHP とんぼ玉とは <https://kinariglass.com/tonbodama>（最終アクセス：2019年12月12日）

第2節 ガラスの誕生

とんぼ玉は現在、世界中で作られており、その起源を辿れば紀元前41世紀頃エジプト・メソポタミアまで遡る。とんぼ玉が生まれる以前、人々は自らを着飾るために天然石や宝石などの石を装飾品として利用していた。ある日、人々はガラスを発見し、加工する術を得てとんぼ玉を制作した。ガラスを加工し、好みの形や模様を作り出すことができるとんぼ玉は、人の手で生み出される宝石として古代の人々から愛されたのである。

ガラスの主成分は珪砂^{けいしゃ}7、それにソーダ灰と石灰で作られる。そのほかにも東洋のガラスに多く用いられた鉛丹や、炭酸バリウム、ホウ酸・ホウ砂、酸化アルミニウムなどが定量調合によって作られる。これらに金属酸化物を用いて発色させることでいろいろな色彩のガラスが作り出される。

ガラスの起源については、1世紀ローマの博物学者プリニウスの『博物誌』における記述が有名である。

引用：『天然ソーダを商う何人かの商人たちの船がその浜（フェニキアのカンデビアという沼）にはいつて来た。そして食事の用意をするために彼らは岸に沿って散らばった。しかし彼らの大鍋を支えるのに適当な石がすぐに見つからなかったの
で、彼らは積荷の中から取り出したソーダの塊の上にそれをのせた。このソーダの塊が熱せられその浜の砂と十分に混ったとき、ある見たことのない半透明な液体が何本もの筋をなして流れ出た。そしてこれがこれがガラスの起源だという。』

（訳者 中野定雄他、『プリニウスの博物誌〔縮刷版 第VI巻〕』p.1492、1986年）

ガラスの起源の伝説はほかにも諸説あり、「シリア、レバノン、イスラエルの地中海沿岸には大変に美しい白色の砂浜が続くという、この砂浜である時落雷があり、白砂の珪酸と少量の海水成分が一時的な高熱により融合して出来た塊を見たこの地の人々がこれを取りあげ、その製法を知った」という説もある⁸。ガラスは人の手によって作られた物質であるが、天然のガラスも存在する。それが黒曜石である。これらはガラス質の火山岩により生まれ、古代人は黒曜石のナイフや槍を使っていた。

7 珪石が細くなったもの。化学名は酸化珪素 (SiO₂)。

8 谷一尚・工藤吉郎、『世界のとんぼ玉』p.82、1997年

ガラスの発祥の土地はエジプト説とメソポタミア説の二つがある。どちらが起源かは未だに解明されていないが、この地域では紀元前23世紀頃にはガラスが存在したと言われている。ガラスの技法は一子相伝の秘法であり、長い歴史の中で、地域によって衰退と繁栄を繰り返してきた。ガラスの技法はこんにち世界中に広まり、ガラスを見ない日はない。科学技術の発達によりガラス製品は大量生産ができるようになり、安価なガラス製品が流通するようになった。しかし、秘伝とされていた時代ではとんぼ玉をはじめガラス製品は黄金や宝石にも匹敵するものであった。

ガラスは他の物質と違い、加熱溶融から冷却状態になっても結晶化せず非結晶のまま固まる。これを「ガラス状態」といい、そのガラス状態の無機物⁹がガラスである。非結晶の状態で固化するとその表面は表面張力により必ず滑らかな曲面を描く特性がある。この性質を知ったガラス職人がとんぼ玉を作り始め、肉親・縁者、そして人々へと普及していったと由水は述べている¹⁰。

第3節 とんぼ玉の技法

とんぼ玉は、ガラスの二つの技法ホット・ワークとコールド・ワークのうち、ホットワークに属する。ホットワークとはガラスが熱くなっているうちに作る技法であり、同じ技法では吹きガラスやパート・ド・ヴェール法¹¹などがある。

紀元前16世紀頃西アジアのとんぼ玉は石灰岩を用いた開放鋳型を用いた鋳造技法で作られていた。開放鋳型にガラスの粉を詰め、加熱して制作する。この方法で作られたのが紀元前15世紀のミタンニ¹²のうねだまの敵玉や、日本の勾玉やたこ焼き式小玉¹³である。紀元前14世紀頃から芯巻技法で作られたとんぼ玉が登場する。こんにちのとんぼ玉もこの芯巻技法で作られている。

芯巻技法とは金属の棒に剥離剤を塗って乾燥させたものを芯とし、熱したガラスを巻きつける。現在はとの粉¹⁴やガラスを取り扱う会社が製造した専用の離型剤と呼ばれる薬剤を剥離剤として使用しているが、古代は耐火粘土を使用していた。芯に巻きつけられたガ

⁹ 有機物を除いたすべての物質。金属・塩類・水、水素・酸素・窒素などの各種の気体。無機物質。

¹⁰ 工藤吉郎、『世界のとんぼ玉』、p.83、1997年

¹¹ 耐火型に粉ガラスを入れて溶かす技法。

¹² メソポタミア北部にあったとされる王国。

¹³ 鋳造により制作された小玉のこと。

¹⁴ 砥粉。板や柱などの着色・目止めや漆器などの「塗り下地」。あるいは、刀剣を研いたりする粉。

ラス種が熱いうちに形を整形し、模様となるガラスを貼り付ける。あらかじめガラスで作ったモザイク模様の板ガラスや人面のパーツ、花のパーツを貼り付けることでとんぼ玉の模様に多様性が生まれる。ガラスは急冷・急熱に弱いため、徐々に冷却させる。この工程を徐冷^{じょれい}といい、作ったとんぼ玉を芯ごと藁灰や徐冷材カルライトなどに入れて1時間ほどで完了する。現代では大きめのとんぼ玉は電子炉に入れて徐冷するという形もある。徐冷後は剥離剤を水で洗い流し、芯棒からとんぼ玉を取り除きやすくする。穴の中に残った剥離剤を取り除き、完成する。

加飾方法は先述のように熱いうちに加飾するホット・テクニックと、徐冷後に加飾するコールド・テクニックがある。後述するシェブロン玉のように機械による研磨やカットを施したり、薬剤を用いてエッチング加工¹⁵を施すなどの加飾もできる。これらの加飾方法を必要に応じて施したら完成である。

芯巻技法はとんぼ玉を制作するにあたって最も簡単な技法である。しかしガラスの特質で加熱しすぎるとガラスは溶け、形が崩れる。逆に加熱しないとガラスは固まり、思うような形に変化しない。また、作業途中で火から遠ざけ、また急に熱するとガラスは急激な温度変化によって割れる。加工の際も力の加減によっては剥離剤が崩れ、とんぼ玉は崩壊する。また、細やかな模様付けや加飾は簡単なものもあれば、とても複雑なものもある。美しい花をとんぼ玉に浮かべるためには、花のパーツを一からガラスを溶かして作るため時間がかかる。そこにとんぼ玉の難しさがあり、また、そのことがとんぼ玉の価値を高めているのである。

¹⁵ 腐食させ、金属などを凹彫りする技法。浮かび上がらせたい模様部分を保護し、フッ化水素と硫酸の混合液で腐食して下の層の色を表出させる。現在は酸性のない安全な薬剤などもある。

第2章 とんぼ玉の歴史

第1節 古代

完全ガラス玉の最古は紀元前25世紀のものである。それ以前のものは施釉石玉¹⁶やファイアンス¹⁷玉、そして不完全ガラス玉である。完全ガラス玉とは不完全ガラス玉と違い、適正な割合でガラスの原材料を調合した上質なアルカリシリガラスで作られている。第1章第2節でも述べた通り、とんぼ玉の起源はエジプト・メソポタミアが発祥であるとされており、多くの遺跡から発掘されている。

紀元前14世紀頃を境に芯巻技法でとんぼ玉が制作されるようになる。この頃、芯巻形象玉と呼ばれるとんぼ玉がエジプトで多く見られるようになる(図1)。芯巻形象玉とは芯巻アヒル玉、芯巻ハート玉など何らかの形を模したとんぼ玉である。紀元前7世紀から紀元前1世紀では芯巻人頭玉がフェニキア・レヴァントにて製作された。また、カルタゴでは芯巻有髭人頭玉、芯巻羊頭玉、芯巻ヒヒ玉などが制作されていた。

また、古代から今も人気の文様の重ね貼眼玉もこの頃である。これは同心円を重ねた模様が目玉のように見えることから「アイビーズ」とも言われている(図2)。紀元前13世紀エジプト新王国に重ね貼眼玉の先行形態が生まれ、紀元前4世紀から紀元前5世紀頃にこれらはフェニキア・レヴァント等東部地中海域製は西欧ケルト、アケメネス朝ペルシア、中国にまでもたらされ、また現地で模倣され製作された。

また同じ貼眼玉でモザイク貼眼玉もこの頃誕生する。モザイクガラスとはあらかじめ作っておいた様々な色ガラスの断片をならべ加熱接着して成形したガラス製品のことをいう(図3)。モザイク貼目玉はこの技法のように同心円モザイクガラス棒を輪切りにし、貼り付けたとんぼ玉である。紀元前5世紀から紀元前3世紀フェニキア・レヴァントにて製作されているが、その数は少ない。10世紀以降のヴァイキング交易玉にもこの技法の玉がある。紀元前2世紀のモザイク貼眼玉は同心円モザイクから人面・花・格子・ロータス

(蓮)などの文様のモザイク玉や縞状モザイクの薄板を芯巻ガラスに貼り付けした玉、貼眼の上に捻線を巻きつけた玉などもある。古代のとんぼ玉はさらに発展する。紀元前3世紀から「金層玉」もしくは「ゴールドサンドウィッチ」と呼ばれるガラスを二層にし、そ

¹⁶ ガラスに近親のほかの物質を核とし、その表面にガラス質の被膜(釉)をかけたもの。

¹⁷ 石英微粒砂の表面をアルカリ溶剤で覆い焼成したもの。

の間に金箔を挟み込んだ玉がボスフォラス王国¹⁸やアルサケス朝パルティア¹⁹などにて誕生する。金層玉はガラスの間に異物を挟んでるため、破損しやすい特徴を持つ。吹きガラス成立以前の紀元前3世紀以降は芯巻技法による金層重ね貼付け玉が生まれ、紀元前1世紀の吹きガラス成立以降は吹きガラス技法を用いて製作される。太細二種のガラス管を作り、これを重ね合わせて適当の長さに切り、必要があれば中間を挟んでいくつかねじれを入れた金層重ね筒狭玉が生まれる。3世紀から4世紀にギリシア系植民都市が滅亡するに伴い金層玉の製造は途絶えた。

第2節 中世

地中海域はローマ帝国が没落するとともに、とんぼ玉も衰えることとなる。5世紀から8世紀イギリス・メロヴィング王朝のとんぼ玉が地中海のとんぼ玉に代わって愛用されるようになる。しかしこれらのとんぼ玉を由水は「ローマ時代のトンボ玉のような華麗な美しさはなく、素朴というよりはむしろ粗雑な作りといったほうが適当な玉類である」²⁰と評価する。中世のとんぼ玉はモザイク玉の時代である。モザイク玉とはあらかじめ作られたモザイク板を加熱し、折り込んだり丸めたりすることで玉にしたものである。これらは5世紀から6世紀のササン朝ペルシア・ビザンチンが最古とされ、ハンガリー・香川県の同時期の古墳でも出土されている。北欧では8世紀から11世紀遺跡からバイキング玉と通称される製作地は不明の独特の折込モザイク玉や、古代の文様をモデルにしたとんぼ玉が出土されている。これらの玉はスカンジナビア一帯で製作されたものではなく、貿易の結果もたらされたものであり、この頃からとんぼ玉を用いた玉貿易が始まっていることがわかる。

中国では西方デザインでありながら素材が中国独自の鉛バリウムガラスで作られたものも出土されている。七星文は西アジアにて作られたものをもとに中国風にアレンジされたと考えられている。しかし西アジアのとんぼ玉よりも中国のとんぼ玉の方が七星文の造詣が優れている。

日本では少し遅れてとんぼ玉文化が誕生し、日本最古のガラス玉・勾玉が歴史に登場する。弥生期のガラス勾玉は鉛バリウム系で製作されており、中国から伝来した璧を砕いて鑄型に充填・加熱して製作されたとされている。また同時期後期には鑄型を使用せず、棒

¹⁸ 黒海北岸のギリシア系植民都市。

¹⁹ 古代イランの王朝。

²⁰ 由水常雄、『トンボ玉』p.98、1989年

に巻き取ったガラス種を挟みながら引いて製作したものも存在している。この時期にたこ焼き型小玉と呼ばれるとんぼ玉も日本で生まれる。古墳時代以降に作られたたこ焼き型小玉の技法は現代のアフリカ、ガーナのダルバー、アシャンティ王宮工房などでも用いられているが、源流はどこからかは不明である。また折込モザイク玉、金層・重層ガラス玉などが出土されており、西方系のガラス玉が流入されていると考えられる。奈良時代には金属鉛から酸化鉛を製造した後、これを原料に鉛ガラスを製造し、ガラス玉を製作していたという記録が正倉院文書中の「造物所作物帳」にある。また、この造物所作物帳には時代に大量に玉が作られたことも、記されている。正倉院で出土された玉を正倉院玉というが、これらはさらに細分化され、捻り玉、雁木玉、辻玉など形や模様ごとに名前がつけられた。これらのとんぼ玉は装飾品として作られたのではなく、器物の付随的装飾品であったり、寺院の須弥壇²¹に敷き詰めるための荘厳具として用いられるためである。これらのことは平安時代まで続いていたが、徐々に衰退し鎌倉時代末期には断絶に近い状態となる²²。

第3節 近代

第1項 ヨーロッパ

近代ヨーロッパのとんぼ玉はヴェネツィア共和国とオランダのとんぼ玉を取り上げる。

ヴェネツィアは11世紀から12世紀の神聖ローマ帝国時代にヴェネツィア商人が比較的小規模ながらとんぼ玉の商いをしてきた。徐々にアフリカ北岸と西岸との商いがはじまり、その規模が拡大した。16世紀頃からヴェネツィアはアフリカと積極的な貿易をするようになるが、それはオリエント寄りの独占貿易体制が崩壊し、スペイン・ポルトガル・オランダ・イギリスが海運力を発揮してオリエント貿易株を奪ったことと、17世紀ボヘミアン・ガラスの隆盛によりヴェネツィアン・ガラスがヨーロッパ市場を追われたからと考えられる。これによりヴェネツィアでしか作れないミルフィオーリー・ガラス²³技法を活かした製品が盛んになり、応用してとんぼ玉にすることでアフリカで人気になった。これらのとんぼ玉は中東・東南アジア・アメリカ・台湾、そして日本にも交易の結果伝わることになる。

²¹ 仏教寺院において本尊を安置する場所であり、仏像等を安置するために一段高く設けられた場所のこと。

²² 由水常雄、『トンボ玉』p.98、1989年

²³ ミルフィオーリー・ガラス：ミルフィオーリー(Millefiori)はイタリア語で「千の花」。断面は花のような形をしているモザイクを敷き詰めたもの。

ヴェネツィアは1291年ムラーノ島にとんぼ玉をはじめとしたヴェネツィアン・ガラスの職人を集めた。これにはガラス技術を国外に漏らさないためであり、火災発生時の被害の広がりを防ぐためである。ガラス職人たちは特権を与えられる代わりにムラーノ島で幽閉されることになる。その特権も幽閉の代償としては軽いものであるため、島外へ逃亡するガラス職人も少なくなかった。

ヴェネツィア共和国の商売敵のオランダも美しいとんぼ玉を作り、西インド会社や東インド会社を介してアフリカ・アメリカ・台湾・日本に輸出するようになる。彼らの貿易対象はアフリカやアジア、日本もその対象の一つであった。鎖国下唯一交流があったオランダのとんぼ玉が長崎に伝わり、そこから日本でとんぼ玉の流行と制作が始まる。特徴としてミルフィオリー・グラス、単色の大玉、縦縞文様のもの、波紋状のもの、もしくはこれらをうまく組み合わせたものなどの丸玉、管玉シェブロン玉がある。シェブロン玉はオランダのとんぼ玉の一つである(図5)。シェブロン(chvron)は英語で「山形」という意味であり、断面が山のような形のため、この名前が付けられた。作り方は多数の色ガラスを幾層にも被せ途中で歯車形モールドを挟み、再び色ガラスを被せる。これを2、3回繰り返し、両端へと強く引く。できた棒状態の管を短く切り、切り口に丸みを持たせるように削り込み完成する。これらは東南アジアに需要があった。また、シェブロン玉はオランダのとんぼ玉のイメージが強いが、その誕生は1490年頃ムラーノ島のガラス職人の娘マリア・パロヴィエールによって考案されたものである。シェブロン玉は「ビーズの貴族」といわれ、族長達の間でのみ取り引きされた富と権力の象徴であった²⁴。アフリカにもたらされた美しいとんぼ玉はアフリカの人々を魅了し、自らの金銀財宝を引き換えに、さらには奴隷と引き換えに交換されるほどの価値を持った存在となるのであった。

第2項 アフリカ

アフリカは本章第1節第1項でも述べた通り、古代からとんぼ玉をエジプトで製作をしていたが、16世紀を過ぎてからはヴェネツィア・オランダからの輸入が主となる。17世紀にポルトガル・オランダによる植民地がアフリカに作られると。オランダと北・西岸域は17世紀から、ヴェネツィアは18世紀からこの交易に参加し、両国のとんぼ玉がアフリカの黄金や宝石、奴隷と交換される。この交易でもたらされるとんぼ玉は民族によって好みの色や形は違えども、それぞれ現地人の好みに合わせて制作されたとんぼ玉であった。

²⁴ 上田雅子、『旅するとんぼ玉』、2008年

また、アフリカ西岸部ではこの地でしか見られない色の縞文様の素人が作ったようなとんぼ玉が大量に発見されている。これらは「アフリカ再生とんぼ玉」と呼ばれる（図6）。これは瓶や皿容器などのガラス材料を砕き、粘土板に穴をあけ、ガラス粉を重ね合わせて薪中に入れて焼き上げて作られた。このアフリカ再生とんぼ玉が作られた理由として二つある。一つ目は単純に原住民の好みで作ったということ。二つ目は肉親や知人たちが奴隷として連れ去られることの悲しみや怒りを彼らもたらしたガラス瓶などを打ち砕いて薪中に入れることで無言の抵抗を示すために作られたという説である²⁵。このアフリカ再生とんぼ玉の歴史は19世紀から20世紀にかけて続き、ヴェネツィアやオランダのとんぼ玉を砕いて貼り付けたミルフィオリー貼り再生とんぼ玉もある。

第3項 日本

日本では江戸時代に爆発的なとんぼ玉ブームがきた。その発端は長崎で唯一交流があったオランダから、とんぼ玉をはじめとするガラス製品が流入したことにある。江戸時代に渡来した西洋のガラス工芸は長崎から伝わり、それを見よう見まねで作られ出したのが「びいどろ²⁶」「ぎやまん²⁷」、そして「江戸切子」や「薩摩切子」などの日本固有のガラス工芸「和ガラス」であった。吹き棹を用いた成形法が主流であったが、当時のヨーロッパのガラス技法がうまく伝わっていなかったため、日用品としての実用性には欠けていた。オランダからもたらされたとんぼ玉は「船舶玉」「オランダ玉」とも呼ばれており、人々の間で人気となった。日本では他の国では首飾りとしてのみ用いられていたとんぼ玉を髪飾りや帯留、根付、緒締、屏風や櫛の一部、器物の紐飾り風鎮^{ふうちん}²⁸など様々なものに使っていて、またあるいはアイヌ民族との交易の道具として使ってきた。長崎から伝わったとんぼ玉は北上し、江戸と大阪でもとんぼ玉は作られ始める。とくに大阪は玉造^{たまづくり}や大阪府南部の泉州がとんぼ玉の生産地となった。いわゆる和とんぼ、もしくは江戸とんぼと呼ばれるとんぼ玉の誕生である。

²⁵ 吉水常雄、『トンボ玉』、p.151、1989年

²⁶ 江戸時代のガラスの呼称。古くは中国から伝来された「玻璃」「瑠璃」と呼ばれていたが、江戸時代に南蛮文化が渡来してからはこのように呼ぶ。ポルトガル語でガラスを意味する「ヴィドロ (vidro)」から来ている。

²⁷ 江戸時代のガラスの呼称。「びいどろ」との使い分けははっきりしないが、びいどろは一般的なガラスの総称であったのに対し、ぎやまんは彫刻されたガラスを指した。

²⁸ 掛け軸の下部両端に下げる飾りのこと。

江戸とんぼは種類や文様が多い。これは江戸時代のとんぼ玉が人気であったため、職人たちが各々形と文様を編み出したためだと考えられる。形と文様は以下の表1の通りである。

しかし、江戸時代で花開いたとんぼ玉文化は終焉を迎える。その過激ぶりから1838年、12代将軍徳川家慶のもと奢侈禁止令²⁹が発令されると、櫛・かんざし、煙草入れに豪華な装飾が禁じられたほか、とんぼ玉を持ったり作ったりすることも禁止された。こうして明治時代には、とんぼ玉の技法が途絶えることになる。しかし作家の中には政府の目から隠れ、とんぼ玉を密かに制作していた者もいた。一方でガラス器などは日の目を浴びることとなる。明治時代になると文明開化に伴い近代化と西洋化が始まり、政府が本格的な洋式のガラス工場を品川に設立し板ガラスの製造を試み、安価なソーダ・ガラス製品を作り普及させた。イギリスからガラス工を招き、「船来吹き」を学び、カットやグラヴィール（摺り紋様）などの技術が伝わることで一気に日本のガラス製造が加速する。このことから日本のガラスは「美しさ」や「工芸」というよりは「産業」の面が強くなった時代へと移行することとなる。

第4節 現代

海外ではペーパーウェイトやマール・スカルプチャーなどに芸術性が見出され、他方とんぼ玉（ランプワークビーズ）は、ビーズアクセサリーの素材としてのオリジナリティが重視されている³⁰。現代では作家にもよるが、海外のとんぼ玉は日本と違い、丸という形に拘らず、奇抜な形や模様、不透明ガラスを用いたものや賑やかな色合いが多い。また、動植物も日本のものと比べると肉感があり、立体的な造形などの特徴が多く見られる。これらのことから先述のオリジナリティという点が海外のとんぼ玉には強く見られる。

海外でも日本に近い台湾ではとんぼ玉ブームが2010年代頃から巻き起こっていた。ビーズ作家の松林恵子は現在の台湾のとんぼ玉について興味深いことを述べている。

引用：『台北にある順益台湾原住民博物館では原住民によって蓄えられた貴重なガラスビーズを見ることができる。そしてミュージアムショップには現代のガラスビーズのアクセサリーが売られていて、お土産として大変人気があるそうだ。博物館の

²⁹ 庶民が贅沢・お洒落をすることを禁止し、その中で生活に使う色を制限した徳川禁令

³⁰ 季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMAGA vol.2 p.68、2008年

キュレーターの話によるとガラスビーズ商品はいつも品薄状態とのこと。それというのも数年前に台湾でヒットした『海角七号／君想う、国境の夏³¹』という映画のなかで原住民のガラスビーズがキーアイテムとして使われたからだそうだ。この映画によって台湾とんぼ玉ブームに火が付いたわけだが、もともとガラスビーズを交易品として手に入れることはあっても自分ら作ることがなかった原住民が、現代になってから作り始めたガラスビーズを以前よりも盛んに作るきっかけになった。』

(『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.18』 p.59、2012年)

日本では戦後になってから、一度途絶えたとんぼ玉の技法が現代のとんぼ玉作家の手によって復活し古代のとんぼ玉が復元がなされた。これに大きく関わったのが藤村英雄、飯降喜三郎・喜三雄である。彼らについては第3章第4節にて詳しく紹介するためここでは簡単に紹介する。藤村はガスバーナーではなく昔ながらの炭火と七輪、古代窯を使用し、既存のガラス棒を使用せず、ガラスの色も自ら調合して制作した。そして再現不可能と言われた古代とんぼ玉の復元に成功した。飯降父子は、藤村が中国の古代とんぼ玉の復元が中心であったとすれば、彼らは古代オリエント・ローマのとんぼ玉や近世ヴェネチアのとんぼ玉などヨーロッパのとんぼ玉の復元が中心であった。それだけではなく後のとんぼ玉作家の大御所たちを教育し、当時マイナーであったとんぼ玉を世間に普及することとなる。

藤野まゆみ³²は現代日本のとんぼ玉作家が急増した原因を以下のように述べている。

引用：『全国各地の大小のジュエリー専門学校、アクセサリースクール、七宝教室、いわゆるカルチャー教室などで、とんぼ玉技法講座の受講生が急増したという。無論それまで十五年、二十年以上のキャリアを積み重ねてきた指導的な作家の、旺盛な教育活動も成果を見せはじめ、技術的にレベルの高い造り手も大勢育ってきており、その人達がまた各地で講師を務めているという現状である。実にとんぼ玉造りの裾野の広がり、当初予期した以上の盛況なのである。』

(『きらめくビーズ とんぼ玉代表作家作品集改訂新版』 p.130-131)

³¹ 原題：海角七号。監督：ウェイ・ダーシェン。主演：ファン・イーシェン、田中千絵。2008年8月台湾にて公開された。オフィシャルブログ <http://cape7.pixnet.net/blog/>

³² 昭和38（1963）年東京芸術大学美術学部芸術学科卒業。美術評論、ジュエリー関係評論を多数執筆。

また東京ガラス工芸研究所や富山ガラス造形研究所などガラスに関係する教育施設が設立される。東京ガラス工芸研究所は1981年4月、多岐にわたるガラス工芸の技法を全て学べる唯一の教育機関として由水常雄が開校した³³。この研究所から現在も活躍するとんぼ玉作家が多く生まれ、現在のとんぼ玉文化を担っている。富山県富山市は「ガラスの街とやま」という取り組みを昭和30年から続けている。富山市は明治・大正時代のガラスの薬瓶製造によってガラス工場が多くあり、ガラス職人も多く存在していた。このことから富山市はガラスの将来性や市民との融和性に着目し、「ガラスの街とやま」の取り組みを始めた³⁴。具体的には昭和60（1985）年に「富山市民大学ガラス工芸コース」開設、平成3（1991）年に全国唯一の公立ガラス作家養成専門機関「富山ガラス造形研究所」の設立、平成6（1994）年にガラス産業化とガラス作家独立支援を図る「富山ガラス工房」の開設などである³⁵。また、ガラスの学びと制作の場に加えて鑑賞の場である富山市ガラス美術館が平成27（2015）年に開館された。

北海道小樽市・函館市や関西などガラスに関係のある都市の観光施設には、ガラスの製作体験工房が多く見られ、とんぼ玉もその体験メニューに含まれていることが多い。吹きガラスと違い、大掛かりな施設が必要なく省スペースでも制作できること、1時間ほど徐冷をすればその日のうちに持ち帰りができること、体験料金が低めなことから体験メニューに加えられていることが考えられる。古代では制作場所が限定され、制作方法も秘匿とされていたとんぼ玉は、現代ではインターネット・SNSの発達によってさらにとんぼ玉の情報が発信され続けている。

³³ 東京ガラス工芸研究所HP <https://www.tokyo-glass.jp>（最終アクセス：2019年12月9日）

³⁴ ガラスの街とやまの歴史 http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/History_of_Toyama_city_of_Glass.pdf（最終アクセス：2019年12月9日）

³⁵ 「富山ガラスの街づくりプラン」 http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/master_plan.pdf P1、2009年（最終アクセス：2019年12月9日）

第3章 とんぼ玉の役割

第1節 装飾品

人間ははじめ翡翠や瑪瑙などの天然石や木、骨などを加工し、装飾品に加工して身に付けていた。獣の骨を身に付けることでその力を手に入れるという呪術的な意味合いのものから、所属を証明するものとして、そして自らを着飾ることで自分の権威を知らしめる象徴として、人々は装飾品を作り、身につけていた。ガラスの登場は当時の人にとっては大きな衝撃であっただろう。元は無色でありながら加工次第で様々な色と模様が変わり、炎で自由自在に形を変えることができる人工の宝石は人々を魅了した。上田は著書にて^{すじ}筋瑪瑙めのうそっくりのとんぼ玉を紹介し、「天然石への憧憬」の例としている³⁶。

とんぼ玉は歴史上では首飾りとして扱われているものが多い。日本は弥生時代からとんぼ玉ないしガラス玉が登場し、首飾りとして用いられていたことが確認されている。また古墳時代にはガラス小玉を用いた耳飾り（ピアス）が大阪・富木とみきくまづか車塚古墳にて出土されている。室町時代には玉佩ぎよくはいと呼ばれる天皇、高位高官など高位の男性が礼服時に用いる腰飾りにもガラスの小玉が用いられていることが確認されている。しかし、日本の装飾文化でとんぼ玉の存在は室町時代から忽然と消える。これは応仁の乱（1467～1477）によって経済が疲弊し、装飾文化を担っていた公家が従来の服飾を維持できなくなったため³⁷、とんぼ玉も自然と衰退していったと考えられる。とんぼ玉の装飾品の存在が再び日本で確認されるようになるのは、江戸時代からになる。第2章第3節第3項にも触れたように江戸時代日本のとんぼ玉は他のとんぼ玉文化と違い首飾りに留まらず多様な装飾品として用いられた。特に江戸時代中期から女性の髪型が変化し、かんざしや櫛などの髪飾りが流行になったこと、印籠・巾着や煙草入れなどの提げ物の流行など町人文化が発達したことが原因である。江戸時代のとんぼ玉文化は奢侈禁止令が発令され、廃れるまで続く。

現代のとんぼ玉の役割も装飾品であることがメインである。ガラスの観光資源が多い都市の土産物店やガラス工房、ガラスの関係施設では作家の作品の多くが装飾品に加工されたとんぼ玉を並べている。ネックレスなどの首飾りの他にピアス・イヤリングなどの耳飾り、天然石やビーズを組み合わせたブレスレットやかんざし、羽織紐など、古代と比べる

³⁶ 上田雅子、『旅するとんぼ玉』p.6、2008年

³⁷ 露木宏、『【カラー版】日本装身具史-ジュエリーとアクセサリーの歩み』p.63、2008年

と実に多様な装飾品が存在している。またこういった店舗だけでなく、minne³⁸やCreema³⁹などハンドメイド・クラフト作品のネットショップでもプロ・アマチュア問わず作品が並べられている。第2章第4節でも述べたように現代ではとんぼ玉の普及が、作家の増加による教育普及や、インターネットによる情報の拡散によってなされた。さらに平成初期ではとんぼ玉の技法は教室に通って習得するものであったが、いまは作家の発信するSNSによって教室に通うことをしなくてもある程度は独学で技法を習得できるようになった。ネットショップの増加によって、それまでは売り手が限定されていたとんぼ玉のアクセサリーが専門の作家でなくても販売できるようになった。また新しいアクセサリー金具の開発や昨今のハンドメイドブームによりとんぼ玉の装飾品の多様性が広がったとも考えられる。

第2節 信仰

第1節のとおり装飾品は呪術的な意味合いを持つ。とんぼ玉も同じように呪術や宗教に関わりを持つものがある。「魔除け」の呪術がこめられたとんぼ玉としては「アイビーズ」が代表的である。これは紀元前14世紀のエジプトが起源であるとされている。地中海沿岸、ケルトやアケメネス朝ペルシア、黒海北岸、北イラン、中国からも出土されており、古代のとんぼ玉にはこのデザインが多い。同心円状の「目玉」のような模様は「邪悪なものを睨み返す目」として魔除けのシンボルである。これは古代エジプトの空の神・ホルスの目が守護のシンボルであることが由来である。

同じ魔除けの目玉をモチーフとしたとんぼ玉にトルコの「ナザール・ボンジュウ」がある。これはトルコで有名なお土産品であり、お守りである。多くの地中海文化で邪悪な視線は不運や怪我をもたらすと信じられ、その視線から守ってくれるのがナザール・ボンジュウであるとされる。青地の平たい穴あきのガラスには白目と水色の虹彩、黒の瞳孔がそれぞれガラスで表現されており、人々はアクセサリーや日用品にこのシンボルを用いている。またガラスという素材と相まっ



図1 ナザール・ボンジュウ
(筆者友人撮影)

³⁸ <https://minne.com>

³⁹ <https://www.creema.jp>

て、割れたり壊れてしまった際は持ち主に代わって災いを受け止めてくれたというように信じられている。

魔除けの眼の由来としては、ギリシャ神話のメドゥーサが有名な話である。目があったものを石にしてしまう目を持つ蛇の髪の中の魔物・メドゥーサは英雄ペルセウスによって首を落とされ、その首はペルセウスの武器となり、知恵の女神アテナの盾の飾りとなった。メドゥーサの首は魔除けの象徴として建築物の壁などに掲げられるモチーフになった。紀元前2世紀から後期2世紀のローマで作られたとされる人面とんぼ玉にはメドゥーサの顔のモザイクが貼り付けられたとんぼ玉がある。メドゥーサの首ないし人面のとんぼ玉は魔除けのとんぼ玉として用いられていたのではないだろうか。同じように人頭のとんぼ玉には紀元前6世紀から紀元前4世紀に作られたフェニキアの武者頭形のとんぼ玉があり、これはフェニキア人の護符として作られた⁴⁰。

魔除け以外の呪術的なとんぼ玉にはメソポタミアの七星文のとんぼ玉がある。これには古代から伝わる土着の聖数信仰⁴¹が背景にあり、それらが自然に取り組みられていったのが、七星文のとんぼ玉である。このデザインは交易に乗って中国にまで伝播する。中国の戦国時代に作られたことから、戦国玉とも言われている。

現代の台湾のとんぼ玉にはデザイン性よりも、とんぼ玉の持つ意味や超自然的な力に着目し、買い求めている客が多い。かつて動物や死者の骨や牙で作ったアクセサリーを身につけることで動物の持つ呪力や霊力を得ると考えられた⁴²ように、人々は台湾のとんぼ玉にこめられた呪術的な点に惹かれていることがわかる。

目玉模様ではないが日本最古のガラス玉「勾玉」も魔除けの意味を持つとんぼ玉として分類できる。日本で有名な勾玉といえば三種の神器である八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}である。この勾玉はヒスイで作られているが、日本で出土された勾玉にはガラスで作られたものも発見されている。その他にも、日本では仏教道具である瓔珞^{ようらく}や須弥壇などの荘厳具にもとんぼ玉が用いられていた。現代でも仏教と関わりとんぼ玉に増井敏雅^{ますいとしまさ}のとんぼ玉と和泉蜻蛉玉がある。増井は1986年からとんぼ玉制作を始め、飯降喜三雄に師事を受ける。点と線、そしてひっかけ技法で作られる増井のとんぼ玉は1991年、1996年、2017年に奈良県薬師寺に

⁴⁰ 由水常雄、『ガラス入門』p.22、1983年

⁴¹ 数に吉兆があると信じられる土着信仰。とくに三、五、七は最も吉祥の数であり、七はもっとも安定した完全な数字とされている。ユダヤ教の三博士や七枝燭台などもこれが由来。

⁴² 露木宏、『【カラー版】日本装身具史-ジュエリーとアクセサリーの歩み』p.18-19、2008年

⁴³ 寺院内外の飾り。もしくは仏像の首、胸、衣服の飾りに用いる。

奉納された⁴⁴。和泉蜻蛉玉は大阪府和泉市の山月工房にて作られる大阪府知事指定伝統工芸品である⁴⁵。山月工房の松田有利子はアクセサリーとしてのとんぼ玉だけではなく、世界遺産である平等院の阿弥陀如来坐像の瓔珞を復元や、その他文化財の修復を行なうなど、仏教に関わるとんぼ玉作家である。和泉国（現在の堺市）は奈良時代以前よりガラス玉の産地であり、かつてはたくさんの工房があったが、時代とともに減った。山月工房は数少ない生き残った工房であり、古くから受け継がれる和泉国独自の技法を用いて制作している。

アイヌ民族のとんぼ玉は第4節にて詳しく述べるが、ここではアイヌ民族の変わったとんぼ玉の呪術的な役割について述べる。トンコリという五弦琴の胴の中に「ラマハ（靈魂）」もしくは「サンペ（心臓）」と呼ばれるとんぼ玉を入れる。このラマハ、サンペとなるのはとんぼ玉の代わりに胡桃やビー玉などが入れられることもある。アイヌの思想ではこの世のすべてに魂が宿るとされ、この玉がトンコリの生命力の象徴になるとされている⁴⁶。

第3節 交易

「交易」のとんぼ玉は非常に多い。中世のイスラム商人はとんぼ玉貿易で毛皮や琥珀、奴隷と交換し、16世紀ヴェネチア・オランダはアフリカとの貿易のために美しいとんぼ玉を作り、黄金や宝石、奴隷と交換していた。それほどにとんぼ玉は価値を持っていた。また、この交易によってとんぼ玉は世界中に広がり、同時に技法も広がることとなる。

16世紀頃のヴェネチアとオランダのとんぼ玉は交易の役割として大きな意味を持っている。このようなとんぼ玉を「トレードビーズ（交易玉）」と呼ぶ。代表的なとんぼ玉にはニックネームが付けられ、そのとんぼ玉の歴史が見出せるのである。例えば、1800年代後期から1900年代初期に交易されていたとされるバウレフェイス（Baule Face）はコートジボワールのバウレ族に愛されたことが由来である。同じ頃に取り引されたフレンチアンバサダー（French Ambassador）は北米のネイティブアメリカンのグループがとあるフラ

⁴⁴ 増井敏雅 とんぼ玉 <http://www.t-masui.com/profile.html>（最終アクセス2019年12月14日）

⁴⁵ 平成14（2002）年1月8日指定。 <http://www.pref.osaka.lg.jp/mono/seizo/dento-26.html>（最終アクセス2019年12月14日）

⁴⁶ アイヌと自然デジタル図鑑 <http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201508.html#fn5>（最終アクセス：2020年1月14日）

ンス大使にプレゼントした、あるいはその逆という二つの説がある⁴⁷。トレードビーズは色や形、模様が様々であり、またバウレフェイスのように部族によって好みや価値観が違うため、とんぼ玉の需要に応えるためであると推測する。

交易ととんぼ玉に関する逸話を由水は著書で紹介している。

引用：『ミクロネシアのある島では原住民が昔からすばらしいかすりを織っていて、彼らはそれを、代々家宝として守り伝えている。日本の商業的民芸蒐集家がそれを聞きつけて、原住民の喜びそうなものをたっぷりと携えて、現地に踏み込んだ。ところが、原住民の方は、どのような珍しい品物や金銭を示しても、決して彼らのかすりを出そうとしなかった。仕方なしになぜ分けて貰えないか問いただし、何なら交換してくれるかと問うと、彼らの織布は何ものにも替えられない最高の宝であるから、誰にも渡さないのだという。そして、その宝物に勝るものでなければ、絶対交換しないという。ではその宝物に勝るものとは何か、とたずねると、出されたものが、金茶色のガラスの小玉であった。そして、色はそれより黒くても黄色くてもいけない。ぴったりとこの色のもので、この大きさのものでなければいけないのだという。そのとき、さすがの日本商人も、ガラス玉がいやに美しく見えて、こんなきれいな小さな玉など、今さら作れないだろうと思って、がっくりと肩を落として、引き揚げてきたのだという。』

(『火の贈り物 ガラス 鏡 ステンドグラス とんぼ玉』p.165、1977年)

人々はなぜ黄金や宝石、奴隷と取引するまで、とんぼ玉に惹かれるのか。日本には古代から玉という存在が愛されていたことがわかる逸話が肥前国風土記にある。

彼杵^{そのき}の郡^{こおり}についての逸話にて、景行天皇^{くまそ}⁴⁸が熊襲を退治し、豊前の国宇佐の海濱の行宮に来た際、従者^{かみしろ}の神代^{あた}の直に命じてこの郡^{はやき}の速来^{はやき}の村に遣わして土蜘蛛を捕らえさせた。とある婦人の弟が美しい玉を持っており、嚴重に仕舞い込み人に見せようとしないう。神代^{あた}の直はその弟を捕らえ、問うと確かに持っていると言ひ、「石上^{いそがみ}の木蓮子^{いたびだま}玉⁴⁹」と「白珠^{しらたま}」を献上した。また、別の村に住むとある人物も美しい玉を持っており、愛おしむこと極まりないという。神代^{あた}の直は同じく捕らえ、玉を献上させた。三種類の玉を天皇

⁴⁷ 上田雅子、『旅するとんぼ玉』P.41、2008年

⁴⁸ ヤマトタケルノミコトの父

⁴⁹ イタビカズラの果実に似た黒い玉

に献上すると、天皇は「この国は具足玉そないだまの国というがよい」と言い、彼杵の郡というのはそれが訛ったものであるという⁵⁰。具足玉の国というのは「玉が十分に備わった国」という意味である。

この逸話では天皇相手だろうと玉を手渡そうとしない二人の人物の描写があり、玉という存在が権力者であろうと渡したくない魔性を持つものであることがわかる。

とんぼ玉はガラスを溶かして一つずつ作られるものであり、量産されるものではない。古代でも現代でもそれは同じである。特に古代は同じデザインでも模様の歪みや形の不揃いがある。現代のとんぼ玉も完璧に同じデザインのとんぼ玉はない。店頭に並んでいるとんぼ玉は作家が一つ一つ検品し、形や大きさが揃っているものであるが、よくよく観察すれば模様に差異がある。先述のミクロネシアと日本商人の話でも、「ぴったりこの色のもの、この大きさのもの」は作れないと言うように、とんぼ玉というものは同じデザインだろうと同じ存在はない。世界に一つしかないものだからこそ、人々はそのとんぼ玉に魅せられ、愛好するのだろう。

第4節 継承

「継承」に分類したとんぼ玉としてまずは先ほどから何度か登場している「アイヌ玉」を紹介する。アイヌ玉は祖母から母、母から娘というように継承されてきたとんぼ玉である。祭りの際に用いられたために、信仰のとんぼ玉でもある。代表されるとんぼ玉は浅葱あさぎ色の無地玉であるが、後述にあるように交易の結果もたらされたとんぼ玉もある。また浅葱色は作る際に表面に気泡が入りやすく、それが穴になって表面に残った玉は「虫の巣玉」とも言われる。玉サイはアイヌ玉だけの一連の首飾り、シトキはアイヌ玉一連の首飾りの中央部分に円形で彫り文様の入った金属の飾りがついたものである。これらは普段は玉手箱に納められ、祭りの時のみ女性が身につける。女性の魂として代々受け継がれる。また特徴として玉に人体にちなんだ名前をつけている。アイヌ玉の多くが交易の結果、毛皮と交換でもたらされたとんぼ玉であり、アイヌ民族が制作した玉ではない。主にとんぼ玉は江戸とんぼをはじめとした和とんぼ、オランダとんぼ、ロシア・中国からのとんぼ玉である。

また台湾南部の山岳地帯に住むパイワン族も先祖代々とんぼ玉の首飾りを受け継いでいる。アイヌ民族のアイヌ玉のように大切に隠し持っており、ある村では「首飾りの主玉

⁵⁰ 風土記 新編日本古典文学全集5 P.343-344、1997年

の値は女頭目一人の生命と同じ」「故意に人を死に至らしめた時には、五粒の首飾り玉を以て償いとする」という人命と同等の価値を持つ宝物としてとんぼ玉を重視していた⁵¹。

もう1つ継承するとんぼ玉に「戦後日本のとんぼ玉」を挙げる。戦後、のちのとんぼ玉作家の手によって技法の復活と古代玉の復元がされるとともに、作家の育成が始まった。第2章第4節でも述べたように、とんぼ玉作家のもとで育成された教え子たちが全国で講師を務めたため、平成初めから中頃にかけて全国のカルチャー教室でとんぼ玉技法講座の受講生が急増する。とんぼ玉は電気、ガス、水場が近く燃えにくい場所であれば、ほんのわずかなスペースでも制作できるガラス工芸である。吹きガラスと違い、大きな作業場を必要としない、家の台所でもできるガラス工芸として主婦の習い事や趣味として人気になった。

ここで、古代とんぼ玉の復元と技法の継承、作家の育成貢献した三人の現代とんぼ玉作家について触れたい。一人目は藤村英雄。彼の藤村トンボ玉工房にて製作された「蜻蛉玉」は大阪府知事指定伝統工芸品に指定されている⁵²。また彼が亡くなった後も2代目の藤村眞澄氏や孫の藤村敏樹・広樹・茂樹三兄弟が後を継いで、古代から続く技法を守っている。そして飯降喜三郎、喜三雄親子。彼らも古代とんぼ玉の復元のほかに力を入れたのは作家の教育である。現在、活躍しているとんぼ玉作家の大御所たちの師匠として彼らの名前が上がる。彼らのとんぼ玉ないし技法は「継承」の意味を持つとんぼ玉として分類した。

第5節 記録

第2節から第4項のとんぼ玉はそれぞれに役割を担っているが、それらは同時に装飾品でもある。これから紹介する「記録」のとんぼ玉は、古代から装飾品として使用されていたとんぼ玉とは異なる。認定特定非営利活動法人シャイン・オン！キッズのプログラム

「Beads of courage (ビーズ・オブ・カレッジ) ～勇気のビーズ～」を紹介する。これはビーズの色や形に共通の意味を持たせて繋いでいき、闘病中の子供たちが乗り越えてきた経験の記録となるプログラムである。シャイン・オン！キッズのもととなるタイラー基金は2006年に理事長のキンバリ・フォーサイスの愛息子タイラーが白血病で亡くなったこと

⁵¹ 菊地衛、『とんぼ玉情報局 とんぼ玉の世界③台湾パイワン族のとんぼ玉』、2008年、季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMAGA vol.3 p.39

⁵² 昭和62（1987）年2月6日指定。<http://www.pref.osaka.lg.jp/mono/seizo/dento-23.html>（最終アクセス2019年12月15日）

がきっかけとなり創設された。2012年にタイラー基金はシャイン・オン！キッズに改称され、東京都認定NPO法人となり、小児がんなどの大病と戦う子供たちとその家族へ学術的にその効果が検証された支援プログラムを行なっている。「Beads of courage（ビーズ・オブ・カレッジ）～勇気のビーズ～」もその一つである。アメリカの小児がん病棟の看護師ジーン・バルーシが子どもの場合は、がん治療中の勇気の証を他人に話すことができ、何か形のあるものが必要である⁵³として、2004年に設立して以降、現在は世界8カ国の260以上の病院で導入されている。日本でも数は少ないが、このプログラムを導入している病院がある。このプログラムは『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.15』にて紹介され、同誌vol.28にて「がんばったねビーズ」の寄付が呼びかけられた。

子供達が使用するため、ある程度のガイドラインが設けられるも、プロやアマチュア問わず多くのとんぼ玉作家がとんぼ玉を寄付をした。この取り組みは数少ないとんぼ玉の社会貢献の一例でもある。



図2 ビーズ・オブ・カレッジHPより

赤紫は外来・緊急事態・発作・救急車で運ばれた時、白は化学療法、免疫療法を受けた時、薄緑は検査・スキャンなどビーズに色や形によって共通の意味付けをし、大きな出来事を克服した時に「がんばったねビーズ」として与えられるのがとんぼ玉である（図2）。そしてこのビーズの束は大人たち、家族や医師、看護師とのコミュニケーションツールとしての役割を果たしている。

ビーズを繋げるために自分の経験を振り返ったり、「このビーズを選んだのはこういう理由」という風に子供たちは大人たち会話する存在としてこのとんぼ玉がある。つまり、とんぼ玉が情報共有の記録としての役割を持っているのである。ただ闘病の日々を費やしたのではなく、様々な経験を乗り越えたということはこのビーズの束が視覚的に証明する。また、闘病の結果その子が亡くなってしまった場合も残されたとんぼ玉がその子どもの闘病の記録、生きた証となり、遺族がその子との思い出となる存在となるのである。こ

⁵³ 認定特定非営利活動法人シャイン・オン！キッズのプログラム「Beads of courage～勇気のビーズ～」紹介冊子p.8

のとんぼ玉は最終的には長い一本のビーズ束になるのだが、それをどうするかは子供たち、あるいは遺族に委ねられる。亡くなった子供の生きた証として長いまま飾る遺族や、兄弟や友人に分け与えるなどさまざまである。このビーズ・オブ・カレッジのとんぼ玉は装飾品となることが前提にあるのではない。その点が従来の役割とは違うことがわかる。

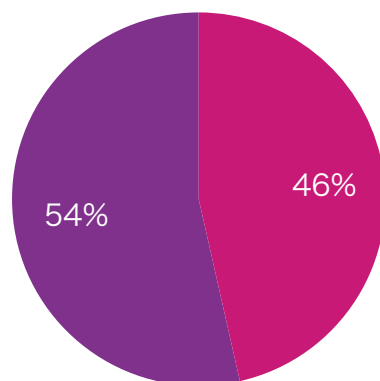
第4章 とんぼ玉の将来性

第1節 若者たちにとってのとんぼ玉

とんぼ玉というのは手作りのガラス工芸である。故に大量生産されるガラスビーズなどと違い高価な値段というイメージが強い。若者にとってとんぼ玉とはどのようなイメージだろうか。弘前大学の学生を対象としてアンケート調査を実施した。回答数は127名であり、データとしては僅少であることが反省点であるが、参考にしていきたい。

「とんぼ玉を知っているか」という問いに「知っている」と答えたのは59名（46%）、「知らない」と答えたのは68名（54%）であった（表2）。この「知っている」と答えた中で主な情報源となったのはテレビと工房、次いでSNSの情報という回答が得られた。また、修学旅行先で他の班がとんぼ玉制作をしていたから存在は知っているという回答も複数見受けられた。

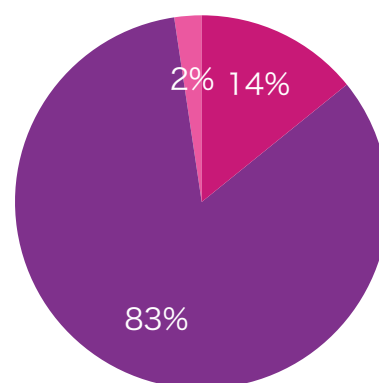
表2 とんぼ玉を知っているか



● 知っている ● 知らない

「作ったことがあるか」という問いには「作ったことがある」が18名（14%）、「作ったことがない」が106名（83%）、無回答が3名（2%）であった（表3）。「作ったことがある」と答えた学生の中で最も多かった場所が北海道函館市であり、旅行の思い出として作ったという意見が多かった。また「とんぼ玉の制作体験があればやりたいか」という問いに対しては「はい」が64名（50%）、「いいえ」が53名（42%）、無回答は10名（8%）であった。

表3 とんぼ玉を作ったことがあるか

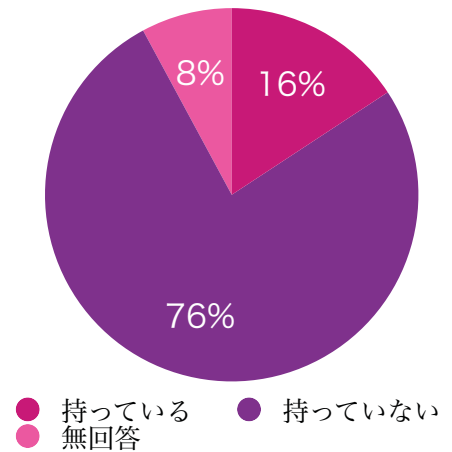


● はい ● いいえ
● 無回答

「はい」と回答した者の中にはとんぼ玉を知らないと回答した学生が「とんぼ玉を知らないので作ってみたい」という意見も多く見られた。また、とんぼ玉制作体験をやりたくないと答えた学生の多くは「とんぼ玉をしらないから」「とんぼ玉がわからないから」という意見が多く上がった。

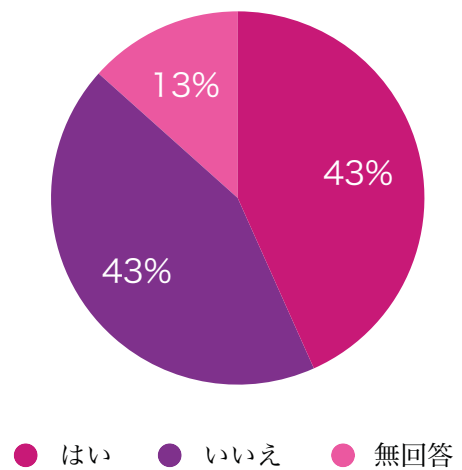
「とんぼ玉を持っているか」という問いには「持っている」が20名（16%）、「持っていない」が97名（76%）、無回答が10名（8%）という結果であり、最も多い装飾品はストラップであった（表4）。持っているきっかけは「自分で作ったから」と「お土産として貰った」が多い。ストラップは年齢や男女問わず使えるものであり、とんぼ玉も安価なものが多い。これらは土産としては安価で渡しやすいため、持っている学生もいることが考えられる。しかしながらとんぼ玉というものは、ストラップ以外はある程度高価なものであることと、認知していない層がいるため持っていないという学生が多数を占めている。

表4 とんぼ玉を持っているか



「とんぼ玉が好きか」という問いに対しては「はい」が55名（43%）、「いいえ」が55名（43%）、無回答が17名（13%）と拮抗した結果となった（表5）。「はい」と答えた学生に「どんなとんぼ玉が好きか」を聞いたところ、多く見られた意見として「柄・模様の美しさ」、「色の好み」、「透明感」があげられた。また、「どのような形で持ちたいか」という問いに関してはストラップが圧倒的に多く、次いでイヤリング、ネックレスと続いた。「いいえ」と答えた学生の理由には「とんぼ玉がわからないから」「とんぼ玉を知らないから」という意見が多く見られ、それと同時に「興味はある」という意見も見ることができた。

表5 とんぼ玉が好きか



このことから、「とんぼ玉を知らない学生」にとんぼ玉の情報を提供したり、実際に見せることで若者に対しても知名度が上がることを期待される。また、制作体験を通して普及することでとんぼ玉を実際に見ることも作ることもでき、さらなるとんぼ玉の普及が期待される。

最後に若者の「とんぼ玉のイメージ」を尋ねた。まずは「綺麗」「かわいい」「美しい」といった意見が多く見られる。「綺麗なのでもっといろいろな色に知ってもらいアクセサリやストラップとして使って欲しい」、「小さくて綺麗な色をしている」、「小さくて

綺麗で膨らむイメージ」、「綺麗で光が当たると色が変わる」、「色が綺麗」、「綺麗な伝統工芸品」、「持つてるといつまでも見てしまう美しいもの」、「綺麗で細かい」という肯定的な意見が多く見られた。また、とんぼ玉を知らないと答えた回答者も「全然知らなかったので何も言えないが、透明なものに色がついているもの？綺麗なもの」、「初めて聞いたのでわからないが、ネックレスなどに使われるらしいので綺麗だと思う」という意見を述べていた。とんぼ玉といえば基本的な形は丸が多いため、「丸さ」に言及する意見も多かった。丸くてガラスであることから「ビー玉と似てる」、「ビー玉みたいなもの」という意見や、「綺麗なビー玉」、「とんぼのようにホバリングできるビー玉のようなもの」などとビー玉と混同する意見もあった。

「とんぼ」という言葉にひかれてとんぼにイメージを湧かせる学生もいた。とんぼ玉を知っていると答えた学生からは「とんぼの目を真似た玉」、「とんぼの目玉」という意見があがり、知らないと答えた学生からは「とんぼが入った玉」、「飛ぶもの？竹とんぼ？」という意見を得た。

ガラス工芸という点から「火とかを使って作るガラス製品」、「バーナー加工がかっこいい」、「使うガラスの色によって様々な色になる」というガラスに直接結びついた意見や、「繊細」「手作り感が溢れるもの」「職人が一つ一つ作り出していて同じものがないもの」という工芸に関する意見も見られた。ガラスという素材から「光を感じる」という意見もあった。ガラスに関係する町をイメージする学生もおり、「函館で体験できる」、「小樽の伝統品のイメージ」という意見もあった。また、とんぼ玉の一目簡単そうな見た目から「作れそう」、「はじめてでも簡単に作れる」というイメージも見受けられた。

季節に関する意見として、とんぼ玉に「夏」をイメージする意見がある。これはガラスの素材からイメージされる「涼しさ」からであると同時に、「夏休みの親子ワークショップ」のイメージもあると答えた学生もいる。

とんぼ玉は「和」のイメージが強いのか、「レトロ」、「和装の装飾に用いる」、「(着物、和服を着る)少し年齢が上の人が持っている」、「着物の帯のアクセサリ」、「かんざしに付いている」という意見が上がった。また、着物のイメージから「高価そう」という価値について触れる意見もあった。アンケートの回答者にブラジルからの留学生がいたが、「ブラジルでは本物の宝石だと思われていた」という貴重な意見があった。また台

湾出身の留学生は「原住民」のイメージがあると答えた。第2章第4節でも触れたように台湾では原住民のトンぼ玉がブームであることが受け取れる。

そしてやはりトンぼ玉はアクセサリーであるというイメージが強い。上記した意見にもアクセサリーに関する意見があるほか、「小物・アクセサリーに多用される」、「年齢問わずにアクセサリーとして身につけることができるため親子でも共有できる。」という意見があった。

この結果を踏まえると以下の点がわかる。

- ① トンぼ玉に対する若者の認知度はやや低い。作ったことのある人数はより少なく、トンぼ玉という存在が若者にとって身近なものではない。
- ② 若者にとってトンぼ玉は高価な工芸品であり、和装の装飾品、もしくはアクセサリーとして使用されているイメージが強い。

トンぼ玉のイメージで「高価そう」という意見があったが、あながち間違いではない。もちろん安価なトンぼ玉もあるが、海外で量産されたトンぼ玉であったり、若者向けもしくは簡単なお土産品として商品開発されたものである。トンぼ玉作家が作るトンぼ玉は若者には少し手が届きづらい価格帯であったり、購買層である年齢層に向けてのデザインや、和装を好む人へ向けた装飾品である。また、認知度が低い点については、トンぼ玉と出会う場が少ないことが挙げられる。トンぼ玉を取り扱うガラス工房やトンぼ玉の教室の存在が身近にないことから、トンぼ玉の知識だけでなく存在そのものを知らないことが多い。若者が購入するトンぼ玉はストラップやネックレス・イヤリングなどのアクセサリー商品であることが今回のアンケート調査で判明した。将来的には購買層となる年齢層であるため、若者へのトンぼ玉のアプローチをどのように展開していくかが課題となる。

第2節 現代日本トンぼ玉の現状～芸術品か、部品か～

作家によってトンぼ玉を「装飾品の部品」として制作する人間と「トンぼ玉という一つの芸術作品」として制作する人間、そしてこのどちらも作る人間の三派に分かれる。第2章第4節にて海外のトンぼ玉はアクセサリーの素材としてのオリジナリティに重きを置くというが、日本のトンぼ玉作家はトンぼ玉を一つの完成された芸術作品として制作する機会が多いとされている⁵⁴。

⁵⁴ 2008年、季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMAGA vol.2 p.68

歴史を振り替えると常にとんぼ玉は作者本人ではなく、購買層を対象に制作がされている。第1章第2節にて由水が述べるように、とんぼ玉の始まりは作者の家族や友人へ作ったものであった。ヴェネチア・オランダの交易玉はアフリカの人々が好むようなデザインや色合いを狙って制作された。常にも買ってくれる相手がいることが前提であり、その人々に向けたデザインがなされてきた。

日本のとんぼ玉作家の作者を見て筆者が思うことは「作者の世界観の濃密さ」である。もちろん海外のとんぼ玉を見れば作者の個性を感じるが、他と被らないような模様・色・形といった個性の主張である。ここでいう世界観とは作者の来歴や影響を受けたものからしみるデザインであったり、作品の題材である。小さなとんぼ玉というガラスの球体に自分の世界観を収める作品が日本のとんぼ玉作家には感じられる。それが個性となり、作者の持つ技法と噛み合い、作者の世界観を有したとんぼ玉になる。そして、その作者の世界観に共感したり、惹かれた購買層がとんぼ玉を買う。そのとんぼ玉を装飾品とするか、鑑賞を目的とするかは買った本人次第である。作家によっては買われることを前提に装飾品に加工して店頭で並べる人が多いが、単品として並べ、後から加工を承る作家もいる。竹内大佑はとんぼ玉を単品として作りつつも、コレクションにしたりアクセサリーにするのは買った人の自由であり、かつそれがとんぼ玉本来の姿であるとも述べている⁵⁵。とんぼ玉の将来性に触れる際にこの「芸術性」という言葉に触れることが多い。以下に日本のとんぼ玉作家でとんぼ玉と芸術性について考えられている作家を紹介する。

いそのあきこ 磯野昭子⁵⁶はとんぼ玉を芸術品として単品で制作し、とんぼ玉が「携帯芸術（モバイルアート）」という「小さくても常に携帯することのできる彫刻であり絵画であるジャンル」として確立されればよい⁵⁷と述べている。装飾品を身につけるといった目的の他に、芸術品であるとんぼ玉を運搬するためのツールとして利用する可能性を持っている。

としき 内田敏樹⁵⁸は「ある世界を切り取って、玉にして、ポケットに入れられる。これがとんぼ玉だと思っています。」と述べる⁵⁹。この発言は磯野が提唱する「携帯芸術」に通じる

⁵⁵ 創作市場44号『とんぼ玉に遊ぶ2』p.21、2012年

⁵⁶ カエル、イカ、三葉虫など生き物のモチーフに宇宙や海といった自然を組み合わせたストーリー性のあるとんぼ玉を作る作家。

⁵⁷ 創作市場44号『とんぼ玉に遊ぶ2』p.11、2012年

⁵⁸ 『古代の花とんぼ玉』『南の島のとんぼ玉』など、緻密で落ち着いた色合いのモザイク玉が特徴のとんぼ玉作家。

⁵⁹ 創作市場39号『とんぼ玉に遊ぶ』p.13、2006年

ものがある。とんぼ玉というガラス玉に作家自身の表現、世界観、培ってきた技法を詰め合わせられたそれらは、磯野が言うようにポケットに入れたり、あるいは紐を通して装飾品へ加工して持ち運べる携帯できる芸術であると言える。

自分の世界観をとんぼ玉で表現する作家にたかはしともこ⁶⁰がいる。彼女は「私の作品は、ガラスのキャンバスに描いた「絵」、つまりそれで一つの世界を表現している」と自身のとんぼ玉を説明している⁶¹。とんぼ玉の表現で特徴的なのは球体という点である。絵画のような平面作品とは違い、とんぼ玉は回すことができる。回す表現を利用して、ストーリーを組み込めるのである。

生田信子^{いくたのぶこ}⁶²のとんぼ玉は「のぶちん玉」と言われ、特徴としては丸くない、いわゆる変形玉が多い。また、とんぼ玉一つで納まるのではなく、複数個のとんぼ玉を組み合わせて一つの作品を作り上げるのも特徴的である。初出品でありながら受賞作の『ドラゴン』は龍の玉を連ねて一匹の龍となる。とんぼ玉で球体関節人形のような人体も彼女の特徴である。これらの彼女の作品は装飾品のパーツではなく、とんぼ玉の集合体としての「芸術作品」であるともいえる。生田の作品は装飾品となっているものもあるが、とんぼ玉で構成された球体人形やオブジェは磯野の言う「小さくても常に携帯することのできる彫刻であり絵画であるジャンル」の「携帯芸術」ではなく、いわゆる純粋美術に近いものだと筆者は考えている。

純粋美術と応用美術。とんぼ玉はどちらに該当するだろうか。純粋美術とは作家が芸術性を追求して制作した美術作品であり、絵画や彫刻が該当する。応用美術は芸術性やその技法に実用性に付与したものである。これに装飾品や絵付けされた陶器、彫刻が施された家具などが該当する。とんぼ玉単体を鑑賞用として用いるのであれば、純粋美術に該当するだろう。しかしこれを購入した側が装飾品にしたいと加工された場合、応用美術へと変化する。このようにとんぼ玉はひとつの作品に二つの側面（純粋美術と応用美術）を持つ特殊な美術作品とも考えられる。

⁶⁰ 絵本のようなメルヘンで独特な世界観のとんぼ玉が特徴。

⁶¹ 創作市場44号『とんぼ玉に遊ぶ2』p.17、2012年

⁶² 2000年から制作開始。多数のコンテスト・大会にて受賞経験のあるとんぼ玉作家。

第3節 とんぼ玉の装飾品以外の実用例

とんぼ玉の将来性に関わる際に、「装飾品、アクセサリ以外の展開」と言う声が作家の間ではあがっている。西尾正剛⁶³は今の環境は過去と比べて技術・情報に発達していることが過去の環境よりも有利であると述べてつつも、知名度・技術の普及によって作り手が増えたことによる「とんぼ玉作家という職業の難しさ」に言及する。それとともに江戸時代のとんぼ玉が海外の珍しいガラスによって消えていったことに触れ、現代でも海外の安い質の良いガラスに対抗しなければいけないことからアクセサリだけでない活路を切り開かなければならないと述べている。その例としてコレクションビーズとしての販路拡大を提案している⁶⁴。

装飾品以外のとんぼ玉の実用例として、江戸時代では風鎮と呼ばれる掛け軸の下部両端につけられる重りや器物の紐飾りがあげられる。これらは人体を飾る装飾品ではないが、器物の装飾品として用いられている。装飾と言う点からは脱していないのが現状である。

とんぼ玉は使われているガラスによって、また大きさによって重さが違う。筆者がとんぼ玉のアクセサリをイベントにて展示販売していた際に、参加者から「ガラスの耳飾りは重くて付けたくない」という意見をいただいた。大きなとんぼ玉は装飾品として用いるのであれば、イヤリングやピアスなどの耳飾りではなく、ある程度重くても構わないネックレスで用いられることに限定される。そのガラス特有の重さを生かしたのが、とんぼ玉の文鎮である



図3 とんぼ玉100人展-輝く手のひらにて
(2018年6月筆者撮影)

(図3)。京都の京とんぼ硝子工房篠瑠璃で製作されている「京とんぼ硝子文鎮」は2016年から同工房にて製作され、美術書「芸術界」(日本芸術年鑑社)に2018、2019年と二年連続で掲載されるとともに、2019年に「文化藝術大賞」(日本芸術年鑑社)を受賞した。初期はとんぼ玉の穴部分に施された持ち手を京都の老舗組紐店の生成りの正絹を用いて組み上げていたが、最近はガラス製になっている。HPにて作家の吉村義次は、この文鎮について「とんぼ玉の作品はどちらかと言うとアクセサリであり、使用範囲や贈答先

⁶³ 1976年から古代とんぼ玉を使った彫金及び現代とんぼ玉の制作開始した作家。手作業で生み出される艶消しと造形的な形が特徴である。

⁶⁴ 西尾正剛、『季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMMAGA vol.7』P.7、2009年

の範囲、趣味趣向に大きく制限されるように思われます。硝子工房篠瑠璃では、とんぼ玉の技法で制作する作品の使用用途の拡大を検討してまいりましたが、その結果、大きなガラス玉の洋風ペーパーウェイトとは異なる、和風で小振りな「京とんぼ玉硝子文鎮」なるものを企画いたしました。机やテーブル上などで、書類やメモ等のペーパーウェイトなどとしてご愛用頂ければと願っております。」と述べている⁶⁵。作者の装飾品にのみ限定されているとんぼ玉の使い道に新たな販路として作り出されたのが、この商品であることがわかる。

とんぼ玉の穴部分に着目したものに香立てがあげられる。使い方は至ってシンプルで、皿や器にとんぼ玉を入れて、穴部分に香を立てるだけである。第3章第2節で登場した山月工房も和泉蜻蛉玉の香立てを展開している⁶⁶。とんぼ玉単品そのもののものもあれば、立ちやすいようにとんぼ玉に足を付けた商品もある。

他にも、文鎮のように重さを生かし、穴部分にメモを挟むクリップを装着したメモスタンドや、穴部分にガラスで作った首を入れた小さな雛人形などがある。アイヌの熊送り儀礼の木鉢にとんぼ玉を嵌め込んだものもある。Beads Art Kobe WEBSHOPにはとんぼ玉が取り付けられるようなフォーク・スプーンなどの食器やボールペンが素材として販売されている⁶⁷。しかしこれらは装飾品と比べると目にすることは少ない。とんぼ玉の装飾品以外の展開はある程度なされているが、いずれも装飾品に比べると展開数や実用の機会の少なさなど様々な点で劣っているように思える。しかしながら、いずれも日用品であることから鑑賞と実用の二つを兼ね備えているため、アクセサリ以外の販路としての今後の展開が期待される。

第4節 とんぼ玉の将来性

とんぼ玉の将来性について日本のとんぼ玉作家はどのように感じているか。

⁶⁵ 硝子工房 篠瑠璃 <http://www.shinoruri.jp> (最終アクセス：2020年1月14日)

⁶⁶ 和泉蜻蛉玉 千の時お香立て (山月工房) 大阪商品計画 <http://www.osaka-products.jp/products/vol5/10/> (最終アクセス：2020年1月14日)

⁶⁷ Beads Art Kobe WEBSHOP <http://www.bead-art-kobe.com/product/4169> (フォーク)、<http://www.bead-art-kobe.com/product/4168> (スプーン) いずれも現在は売り切れ。<http://www.bead-art-kobe.com/product/4180> (ボールペン) (最終アクセス：2020年1月15日)

椎葉佳子^{しいばよしこ}⁶⁸は「日本におけるとんぼ玉やそれを取り巻く業界はどのように展開していくか、またどのようにしていきたいか」という問いに対して、「今後は、誰もが手に入れやすい作品と、高度な技術や芸術性を持った「アート」の領域に達していく作品へとはっきり二分されていくと思っています。そうなってはじめてとんぼ玉は市民権を持つこととなる」と答えた⁶⁹。

椎葉の発言に出てきたこの市民権とは大辞林第3版で調べた際に出てくる「(特殊だったものが) 広く世に行われて一般化すること。」を指すと思われる。とんぼ玉の知名度といえば、小暮紀一⁷⁰の「わたくしがホームページなんぞを立ち上げたころなんていうのは、例えば「トンボ玉」で検索すると3件しか出てこなかった」「ところが今(2007年)じゃあ何万だなんまんだって」⁷¹という言葉や、増井敏雄のインタビューにて「4~5年前(2003~2004年)前までは「とんぼ玉」という言葉も浸透しておらず、(略)マイナーなイメージすらありました」⁷²という言葉の通り1990年代から2000年代初期頃には知人のみぞ知るとんぼ玉の情報や知名度が、現在はそれでこそ何万という情報が提供される時代になった。しかしながら本章第1項のアンケート結果から若者のとんぼ玉の認知度は未だ低いため、今後もとんぼ玉をアプローチしていくことが課題となる。

第3章第1節でも述べたようにとんぼ玉の始まりは装飾品のパーツであったし、これからもそうであろう。現代とんぼ玉作家の中にもアクセサリーに加工することを前提に制作する作家は存在する。長野県安曇野市ガラスアート瑠璃工房の創設者・八木重導^{やぎしげみち}⁷³はアクセサリー・パーツとしてのとんぼ玉を作っている。その上でとんぼ玉を“アクセサリーの民芸品”から脱却し、デパートの宝石売り場に堂々と置けるものを作りたい⁷⁴と答えている。宝石売り場とまではいかないが、とんぼ玉はデパートのギャラリーや催事場でも展開されるようになっている。その際にやはりとんぼ玉はアクセサリーとして陳列されていること

⁶⁸ 深みのある色合いの花・植物モチーフのとんぼ玉の作り手であり、作家以外にもとんぼ玉やランプワーク関係のイベントの実行委員長も勤める作家。

⁶⁹ 創作市場44号『とんぼ玉に遊ぶ2』p.15、2012年

⁷⁰ 1966年生まれ。武蔵野美術大学造形学部及び富山ガラス造形研究所卒業。卒業後に工房『蜻蛉玉 丙午』を設立。とんぼ玉だけではなくコアガラスも制作。富山市のガラス文化に貢献する人物。

⁷¹ 小暮紀一、『季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMAGA vol.1』P.20、2007年

⁷² 増井敏雄、『季刊ランプワークガラス情報マガジンLAMMAGA vol.5』p.4、2008年

⁷³ 1940年生まれ。1990年宮田久英氏師事のもとバーナーワーク1992年ガラスアート瑠璃工房を創設。美しいレース玉の作り手。

⁷⁴ 創作市場44号『とんぼ玉に遊ぶ2』p.23、2012年

が多数を占めている。また、単品で買って加工するよりも初めから加工されていた方が購入者が利用しやすいためであると考えられる。

とんぼ玉の将来性に関して「美術（アート）への達成」という声上がるが、第1節でも触れたようにとんぼ玉は純粋美術・応用美術どちらの側面も持ったものであると筆者は考えている。このことから「美術（アート）への達成」は成されているのではないかという疑問が上がる。作家のいう「美術（アート）」とは何か。これは恐らく純粋美術としてさらに高めるということである。つまり鑑賞に特化したとんぼ玉作品を装飾品のパーツとなるとんぼ玉以外に生み出すことではないかと思われる。鑑賞に特化するということは、アクセサリーのとんぼ玉より多少大きさがあるとんぼ玉でも構わない。ネックレスやストラップなどある程度の大きさでも構わない装飾品であれば、とんぼ玉の「携帯芸術」という点も兼ねることができる。

椎葉の言う「誰もが手に入れやすい作品」（＝応用美術）と、高度な技術や芸術性を持った「アート」（＝純粋美術）に二分するというのではないかと筆者は考える。アクセサリーのパーツであるとんぼ玉も鑑賞されることはあるだろうし、芸術性の高いとんぼ玉もアクセサリーに加工されることはあるだろう。それはひとえにとんぼ玉という存在がどちらも兼ね備えた美術品であると考えられる。とんぼ玉をどう利用するかは竹内が言ったように購入者次第であるため、制作者がその用途を限定する必要性はないともいえる。

第5章 修了作品について

第1節 過去の作品について

第1項 ひろさ季

『ひろさ季シリーズ』（図11）は青森県弘前市の季節をイメージし、四つの季節を二つずつ合計八種類のとんぼ玉を用いたかんざし・ピアス・ネックレスの三点セットとして制作したものである。とんぼ玉とアクセサリーのデザインは8種類それぞれ違うデザインとし、とんぼ玉だけでなくアクセサリー全体で弘前の四季を表現した。2017年6月から制作を始め、2018年8月に筆者の個展にて全作品を公開した⁷⁵。この作品は筆者が弘前へ移り住み、故郷とは違う四季の濃密さや、それらを感じた記憶をとんぼ玉で表現したいという思いから制作された（図4）。



図4 ひろさ季シリーズ
夏『ねぶ玉』『青天』
(2018年8月撮影)

個展の際にとんぼ玉の作品をアクセサリーショップのように飾るのではなく、作品展として飾るにはどのように展示するかを模索した。同年6月にとんぼ玉の展覧会や関係施設の調査をしたところ、展示方法は二種類に分かれる。一つ目にとんぼ玉単体をシンプルに置いた展示方法である。直に置く他に布や皿、鏡の上にとんぼ玉を置いた展示も存在する。この展示方法は複雑で華やかなとんぼ玉を見せるにはいい方法であるが、シンプルな模様のとんぼ玉だと寂しい印象を与えてしまう。また、そのとんぼ玉の世界観を展示で表現しすぎて（例えば造花を大量に置いたり、綿を大量に敷き詰めるなどで）とんぼ玉そのものが埋もれてしまったものもあった。二つ目はアクセサリーに加工し、展示するものである。まるで店頭で並ぶ商品のようにトルソーや飾り台を使い展示する方法で、とんぼ玉を活かしたアクセサリーデザインで見る側もどのようにとんぼ玉を使うかイメージしやすい。しかし無造作に作品を直置きしたものやネックレスのチェーンをぐちゃぐちゃのまま置いたものなどは、作品そのものが素晴らしくても全体的な見栄えが悪くなる。

⁷⁵ 『うつろいならべ〜こなをの とんぼ玉展〜』、2018年8月1～4日、ギャラリーまんなか

この展覧会では購入できる作品も出品しており、販売会も兼ねていたため一層展示方法に気を配らないといけない。筆者はこれらの展示を見て、筆者はとんぼ玉を絵画や彫刻のように美術的に見せるにはどのようにするかを考えた。その結果、16枚の額縁を用意し、デジタルで描いたイラストに直接作品を飾るという方法をとった。イラストは「女性の後ろ姿」を二種類、「口から鎖骨までの女性」を一種類用意し、かつ四季がテーマのため、それぞれのパーソナルカラーで髪色と口紅の着彩を行なった。イラストの髪の上部、耳朶、首に穴をあけ、そこに簪、ピアス、ネックレスをそれぞれ飾り、固定した。これにより、作品を実際に装着するとどのようになるかがわかり、作品自体も映える結果となった。トルソーやマネキンを使用することも検討したが、ギャラリーの白い壁に三面囲まれた空間を活かしたかったことやワークショップの場所の確保を検討した結果このような展示方法となった。

結果としてこの展示方法の評判は良く、そのほかの個展でもこの方法で展示した。またこれらは実際に身につけることができる装飾品であるため、磯野の言う「携帯美術」としての条件を果たしている。

第2項 かさねはな

ひろさ季と同じく個展にて展示した『かさねはな』（図12）はとんぼ玉単体で展示した。筆者自身が以前から色について興味を示し、平安時代の『襲の色目⁷⁶』をテーマとして、表裏の衣の色合いをはなびらで表現した作品を計6点制作した（図5）。

とんぼ玉単体で展示した理由として、平安時代にはとんぼ玉を装飾品として用いてなかったため、装飾品として加工するのは異質であると判断し、女性の手にとんぼ玉を持たせるように作品を展示した。また女性の桂の色がとんぼ玉とリンクするように着彩した。



図5 かさねはな「若菖蒲-wakashoubu-」
(2018年8月撮影)

⁷⁶ 女房の桂の重ねの色合いに名前をつけたもの。桂の生地は薄く裏地が透けるため、それらが重なり美しい色合いを出す。基本色や儀式のための色、季節ごとに名前が付けられていた。

このとんぼ玉は単品となることで鑑賞用に特化し、「携帯美術」とは違うものとなってしまった。しかしこの作品は先述の通り装飾品を用いていない平安時代がテーマであったため、装飾品としての展開は考えなかった。また、当時筆者が使用していたガラス同士の相性の関係で持ち歩いていると割れてしまう可能性を考えて、この作品は絵画や写真のように壁面を飾ることを目的とした鑑賞に特化した作品として制作した。ビーズを壁面に飾るものや、ジモ・ブライモアの「乳搾りの女」⁷⁷のように絵画にビーズを貼り付けた作品なども存在する。総ビーズならぬ総とんぼ玉にすると重さと値段が途轍もない数字となるため、とんぼ玉を飾る場合はこのように一点をシンプルに飾る方がいいと考えている。

第3項 つながるつがる

『つながるつがる』は2018年にギャラリーまんなかにて開催された『どまんなか展』にて発表した。ギャラリーまんなかは弘南鉄道大鰐線中央弘前駅構内にあるギャラリーである。それに関連して弘南鉄道大鰐線の各駅合計14駅をイメージしたとんぼ玉を制作した。駅ごとにある名物や特産品、見える景色などを大鰐線を愛用する後輩から聞き、モチーフとして取り入れた（図6）。



図6 つながるつがる
(2019年3月撮影)

この作品の最大の特徴としてはとんぼ玉の形を統一しなかったことである。当時、習得したとんぼ玉の表現方法を全て活用したいと考え、それぞれのとんぼ玉にさまざまな技法を施した。そのため、『つながるつがる』は展示形態は最終的にとんぼ玉を線路をイメージした金具で繋ぎ、ネックレスにした。単品だと各駅のとんぼ玉としての「個」が強くなるが、ネックレスとして繋げることで大鰐線と言う「まとまり」が生まれる。

筆者はこの作品を装飾品で制作したつもりは全くない。この作品ではそれぞれの駅をモチーフとしたとんぼ玉が一番の主演であるが、単品をその場に展示しただけでは駅同士が「繋がっている」という表現ができない。そのため、金具やチェーンで繋ぎ、結果的にネッ

⁷⁷ アクリル、ビーズ、カンヴァス 1985年。カンヴァスに描かれた絵に直接、ガラスや石のビーズを貼り付けた作品。

クレスとなった。実際に首にかけると14個のとんぼ玉を使用しているため重みがあり、かつ長さもあるため、実用的ではない。展示のためのディスプレイとして装飾品に加工するという試みのもと、ネックレスとして制作した。装飾品の形でありながら、「携帯美術」ではない作品は筆者の知る限りではあまり見られないものである。

もし「携帯美術」としてこの作品を展開するならばネックレスではなく、ストラップを検討している。鉄道ということで男性も購買層に入れるため男女兼用で使いやすいことと、とんぼ玉を各駅に置いてコレクションして貰いたいと検討しているため、手に取るのにちょうどいい価格帯で設定できるのではないかと考えている。この形であれば、鑑賞の側面と実用の側面どちらも兼ね備えることができる。

第2節 修了作品「Emotion8」について

第1項 概要

筆者は四季や色、街のイメージなど形にならないものをテーマに制作をすすめてきた。形にならないものをガラスに表現することに表現することへの興味から、制作してきたため修了制作でも形のないものを表現したいと考えていた。

今回、制作するテーマは感情である。大学院での三年間は様々な感情に振り回される三年間であり、自分のメンタルを整理するために自分の感情と向き合うことが多かった。感情整理に日記を用いたり、感情記録のアプリなどを用いる中で一言で感情と言っても様々なものがあることを知り、これらの感情をガラスを用いて表現することにした。

感情をテーマとした際に参考としたのがロバート・プルチック氏の感情の輪である（図7）。1980年にアメリカの心理学者ロバート・プルチックが考案した感情モデルは八つの基本感情（一時感情）があり、円錐のようになっている。右の図はこの円錐を展開したものである。展開した円錐は花のようになり、花の中央が強い感情、先端に向かって弱くなるように設定されている。また、隣り合う感情同

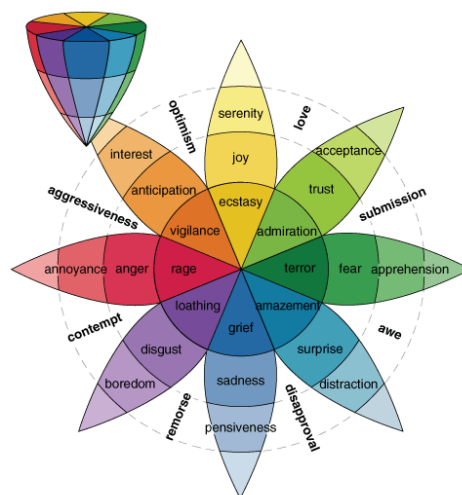


図7 プルチック感情の輪

<http://www.fractal.org/Bewustzijns-Besturings-Model/Nature-of-emotions.htm>より

士を足すと二次感情と呼ばれる感情（画像の花びら同士の間にある文字。右斜め上から愛、服従、畏怖、拒絶、軽蔑、攻撃、楽観）や一つおき同士、二つおき同士を足した感情などが生み出されるというものである⁷⁸。

これを参考にし、とんぼ玉の色彩を上グラフのように決定し、花びらごとの一番強い感情の「恍惚」、「敬愛」、「恐怖」、「驚嘆」、「悲嘆」、「強い嫌悪」、「激怒」、「警戒」合計8つの感情をテーマといたとんぼ玉を制作し、一連の作品を「Emotion8」と題した。

とんぼ玉のデザインは感情ごとに変化させ、この三年間で学んだ技法を応用し、それぞれの感情を連想させるデザインにした。また、『つながるつがる』と違い、感情ごとに形を変化させずに統一した。形は球体ではなく紡錘形に成形し、プルチック感情の輪の花びらの形から連想させるデザインとした。

今回、鑑賞に特化したとんぼ玉と、アクセサリーとして加工するためのとんぼ玉の二種類合計16個制作した。アクセサリーの部品ためのとんぼ玉は小さめに制作し、デザインをやや簡略化し、ネックレスに加工した。その理由として携帯しやすさと、鑑賞するにあたって見やすいアクセサリーはネックレスであると考えたためである。

展示の際に、鑑賞用のとんぼ玉は8個を花びらに見立て、テグス⁷⁹で台紙に固定した（図14）。これにより散在してしまうとんぼ玉をまとめることができる。またネックレスも台紙に切り込みを入れ、額縁へ入れて展示した。今回は修了制作展に展示するため、取り出しができないように展示されているが、実際に販売する際はこの展示形態は取れないだろう。また、額縁の中には作品タイトルを入れて展示の仕器とともにキャプションになるようにした（p.45 図8）～（p.47 図16）。

第2項 デザインに取り入れた技法・文様

作品に取り入れた技法・文様は表1の通りである。

⁷⁸ <http://www.fractal.org/Bewustzijns-Besturings-Model/Nature-of-emotions.htm>（最終アクセス：2020年1月18日）

⁷⁹ 天蚕糸。テグスサン・カイコなどの幼虫の体内からとった絹糸腺を、酢酸につけて引き伸ばし、乾かして作った糸。透明で、釣り糸などに用いる。現在は、合成繊維で作った類似のものにもいう。

感情	色	取り入れた技法・文様
恍惚	黄色	線流し、花文様
敬愛	黄緑色	斑点文様、透きかけ、レース
恐怖	緑色	線流し、同心円文様
驚嘆	水色	斑点文様、泡
悲嘆	青色	銀箔
強い嫌悪	紫色	透きかけ、引っ掻き
激怒	赤色	線流し、透きかけ、引っ掻き
警戒	オレンジ色	正倉院玉のように捻って溶かしこみ

表1 Emotion8に取り入れた技法・文様

線流しとはとんぼ玉の文様のなかで基礎的な文様である。制作体験でも一番簡単な体験として存在することが多い。地の玉に色や透明度の違う細いガラスの棒で線を引き、回転させると線が徐々に流れていく。マーブル模様とも言われる。芯棒に対し垂直に線を引くか、並行に引くかでも表情は変わる。

花文様は様々な造形のものがあるが、今回は一番シンプルな菊の花文様を採用した。透明なガラスを溶かし、太めの円柱にしたものに線流しのように白い細ガラスで8本線を引く。線流しとのように流れないように温度調節し、一気に円柱をまっすぐ伸ばす。伸ばしたものを切ると花文様のパーツとなる。これを玉に貼り付け、パーツの中央を千枚通しなどで突くと周囲の白ガラスが中央に集まり、菊の花文様となる。

斑点文様には二種類ある。細いガラス棒で斑点を描くものと、ガラス棒を砕き玉にまぶすものである。前者は任意の位置に斑点がつくが、後者はランダムに模様が付く。「敬愛」のとんぼ玉は後者、「驚嘆」のとんぼ玉は前者である。

透きかけは透明なガラスを玉全体に覆いかける技法である。こうすることで玉に奥行きが生まれるほか、先述の花文様を入れた際に花文様の透明部分が目立ちにくくなる。パーツ作りでも多く用いられる技法である。

レース文様は途中までは花文様と同じであり、線を引いた後にねじりながら引くことでレースのような文様になる細いガラス棒ができる。線の本数や線を置く場所、ガラスの色によって様々なガラス棒ができる。

同心円文様は本論に何度か登場する「アイビーズ」の技法である。ガラス棒で点を打ち、何重かの円が重なる文様である。一見簡単そうであるが、火の近さや玉の温度管理に気を遣わないと円が崩れてしまう。

ガラスに泡を生じさせ、水中の表現や泡入りの水玉・花文様などを施す技法がある。全体に施すと涼しげな雰囲気を作り出す。今回は重曹を用い制作した。ガラスとガラスの間に重曹を挟むと反応を起こし、泡が生じさせた。

金箔、銀箔、銅箔、プラチナ箔などは玉に直接貼る方法の他に、透明ガラスに練り込み、棒状にしたものを玉に施す方法がある。今回は銀箔を練り込み棒状にしたものの上に色ガラスを重ねた。

引っ掻きは千枚通しなどで玉の表面を引っ掻いて模様をつける技法である。ハートや葉っぱ、花びらなど様々な模様を作り出すことができる。

第2章第2節でも登場した正倉院玉は、玉をヘラを用い芯棒に対して並行に五等分する。ピンセットなどで五等分にしたガラスをつまみ、90度捻り立体感を残して徐冷すると正倉院玉となる。今回制作した「警戒」はその立体的な部分も溶かしこんだ。



图8 Emotion8
(2020年1月筆者撮影)



图9 Ecstasy-恍惚-
(2020年1月筆者撮影)



图10 Admiration-敬愛-
(2020年1月筆者撮影)



図11 Terror-恐怖-
(2020年1月筆者撮影)



図12 Amazement-驚嘆-
(2020年1月筆者撮影)



図13 Grief-悲嘆-
(2020年1月筆者撮影)



図14 Loathing-強い嫌悪-
(2020年1月筆者撮影)



图15 Rage-激怒-
(2020年1月笔者摄影)



图16 Vigilance-警戒-
(2020年1月笔者摄影)

終わりに

繰り返す言うがとんぼ玉はこれからも装飾品の役割からは逃れられないだろう。しかしながら、装飾品以外の実用的な作品も展開されていることから、装飾品とそのほかでとんぼ玉は人々の生活に溶け込んでいくだろう。

装飾品の部品として生み出されてきたとんぼ玉の装飾品以外の道はまだ発展途上である。西尾がいうように「現代でも海外の安い質の良いガラスに対抗しなければいけないことからアクセサリーだけでない活路を切り開かなければならない」が、第4章第2節のように実用例は少ない。この点は作り手として今後も考えていかねばならない。

呪術的な側面も台湾を見れば続いていくように思える。交易はどうだろうか。かつての金銀財宝や奴隷と交換することができたのは、とんぼ玉の技法が秘匿とされ、生産が限定されていたからこそその希少価値であった。現在は作り手が増え、技法が世界中に広まることとなった。その反面、希少性が失われたことから玉貿易の展開は難しいだろう。継承は今後も我々作り手がいる限り繋がれていくだろう。

ビーズ・オブ・カレッジの活動は装飾品となることが目的ではなく闘病する子どもたちの記録であり、従来にないとんぼ玉の使われ方であった。記録という役割は、現在はビーズ・オブ・カレッジに限定されているが、他に展開はできないだろうか。筆者ははじめ、修了作品の感情の記録をビーズ・オブ・カレッジのようにできないか検討した。感情ごとにビーズを指定し、その日感じた感情を記録するとう試みである。しかしながら大きな問題点に直面する。一つ目に記録したとんぼ玉をその後どうするのか。ビーズ・オブ・カレッジではビーズの束をそのまま飾る、分割して装飾品に加工し身近な人に与えるなど様々である。この感情の記録をその後どうするかという点が解決できなかった。二つ目に、用意するとんぼ玉の数が膨大であること。ビーズ・オブ・カレッジは医療関係者やとんぼ玉作家など、支援者のもとたくさんのビーズが提供されるが、この感情の記録の場合は個人で購入することとなる。制作者側も膨大な数を用意する必要がある。以上の問題点から、この感情の記録というとんぼ玉の計画は頓挫してしまった。記録の役割を担うとんぼ玉の展開は今後の課題である。

作家の尽力と平成初期のとんぼ玉ブーム、SNSの発達によるとんぼ玉の技法の公開により、とんぼ玉の作り手は増えつつある。昨今のハンドメイド・クラフトブームも伴い、と

んぼ玉を作り販売する人も増えた。その作り手が生み出したとんぼ玉というのは装飾品となり、購入されることとなる。

また、将来性に関わるものとしてとんぼ玉の芸術性という点もある。とんぼ玉の美術性とはなにか。精巧で緻密な花のパーツを埋め込むことだろうか。繊細なレース文様を玉全体に施すことだろうか。気が狂うほどのドットを打つことだろうか。抽象的であるが筆者は「世界観を込めること」であると考えている。同じような花のパーツの玉であれ、レース玉であれ、その人の世界観・個性が滲むものである。とんぼ玉の作り手が増え、本や動画で簡単に技法を学べるようになったのは大きな進歩である。その反面、知恵を絞り出して生まれた作家の技法が簡単に知り、模倣できる時代にもなった。しかしながら技法を真似しても同じものは生まれない。とんぼ玉を魂の象徴としているのはアイヌの人々であるが、言い得て妙である。美術性のあるとんぼ玉には作家の魂が込められているのだ。作家の過去の経験や感じたこと、愛したものが作家の魂、すなわち世界観が込められていると考えている。筆者もいち制作者としてこれからも自分の世界観を追求したとんぼ玉を作り続けていきたい。

購入者はそのとんぼ玉を覗く。とんぼ玉を小宇宙と言う人がいるようにとんぼ玉の中に込められた世界観を購入者は共有する。そして持ち帰り装飾品として持ち歩く。磯野の「携帯芸術」という言葉は純粋美術でもあり応用美術でもあるとんぼ玉にぴったりの言葉であると思う。SNSの発達により作品の発表や販売がされやすくなるなかで、今後のとんぼ玉はより美術的側面を担うことになるだろうと考えている。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、アンケート調査に関わった学生の皆様、写真の提供をしてくださった友人H.Y氏、製作のきっかけを与えてくれた後輩のS.S氏とM.H氏そのほか多くの方々にお世話になりました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

また御指導いただきました指導教官のプロダクトデザイン研究室・石川善朗先生に心から厚く感謝申し上げます。学部生時代から七年間もの長い間、大変お世話になりました。石川教授の一言が私のとんぼ玉制作を始めるきっかけであり、あの一言がなければ今の私はいませんでした。たくさんの助言をいただき、書き進めることができました。

家族の支えを始め、たくさんの人の協力があったからこそ修士論文を書き上げることができました。改めて皆さんに感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

由水常雄、『火の贈り物 ガラス 鏡 ステンドグラス とんぼ玉』、株式会社せりか書房、1977年

由水常雄、『ガラス入門』、株式会社平凡社、1983年

由水常雄、『新装版 トンボ玉』、株式会社平凡社、1989年

由水常雄、『ガラス工芸-歴史と技法-』、株式会社東京印書館、1992年

谷一尚 工藤吉郎、『世界のとんぼ玉』、株式会社里文出版、1997年

『きらめくビーズ：とんぼ玉代表作家作品集』、株式会社里文出版、2000年

『古代ガラス讃歌 羽原コレクション+松島巖+矢野太昭』、KOBEとんぼ玉ミュージアム、2015年

上田雅子、『旅するとんぼ玉』、晴耕雨読、2008年

『創作市場』39号「とんぼ玉に遊ぶ」、マリア書房、2006年

『創作市場』44号「とんぼ玉に遊ぶ2」、マリア書房、2012年

中野定雄、中野里美、中野美代訳、『プリニウスの博物誌〔縮刷版 第VI巻〕』、株式会社雄山閣、1986年

露木宏、『【カラー版】日本装身具史-ジュエリーとアクセサリーの歩み』、株式会社美術出版社、2008年

『男も女も装身具-江戸から明治の技とデザイン-』、NHKプロモーション、2002年

町田章、『日本の原始美術9 装身具』、株式会社講談社、1979年

中山公男、『【カラー版】世界ガラス工芸史』、株式会社美術出版社、2000年

『風土記 新編日本古典文学全集5』、小学館、1997年

池谷和信、『ビーズ つなぐ かざる みせる』、国立民族学博物館、2017年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.1』、2007年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.2』、2008年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.3』、2008年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.5』、2008年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.7』、2009年

ジャパンランプワークソサエティ、ムック『季刊ランプワーク情報マガジンLAMMAGA vol.18』、2012年

認定特定非営利活動法人シャイン・オン！キッズのプログラム「Beads of courage～勇気のビーズ～」紹介冊子

参考HP

KOBEとんぼ玉ミュージアム <https://www.lampwork-museum.com>

きなりがらすHP とんぼ玉とは <https://kinariglass.com/tonbodama>

ビーズ・オブ・カレッジ《シャイン・オン！キッズ-小児がん、重い病気と闘う子どもたちと家族の支援のために》 <http://sokids.org/ja/programs/beads-courage/>

藤村トンボ玉工房 <http://fujimuratomodama.jp>

皆から愛されるトルコのお守りナザールボンジュウ|たびこふれ <https://tabicoffret.com/article/35449/index.html>

とんぼ玉 glass beads Blog(増井敏雅) <https://masui32.exblog.jp/20198637/>

MIYABI GLASS STUDIO <https://miyabiglasseye.com/free/profile>

とんぼ玉情報局 <http://bead2.blog26.fc2.com>

東京ガラス工芸研究所 <https://www.tokyo-glass.jp>

「富山ガラスの街づくりプラン」 http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/master_plan.pdf

「ガラスの街とやま」の歴史 http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/History_of_Toyama_city_of_Glass.pdf

「ガラスの街とやま」これまでの取り組み（年表） http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/Toyama_city_of_Glass_art_Biography.pdf

増井敏雅 とんぼ玉 <http://www.t-masui.com/profile.html>

大阪の伝統工芸品「和泉蜻蛉玉（いずみとんぼたま）」アクセサリー山月工房 <https://izumi-tombodama.com/index.html>

大阪府／和泉蜻蛉玉 <http://www.pref.osaka.lg.jp/mono/seizo/dento-26.html>

大阪府／蜻蛉玉 <http://www.pref.osaka.lg.jp/mono/seizo/dento-26.html>

アイヌと自然デジタル図鑑 <http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201508.html#fn5>

The Nature of Emotions <http://www.fractal.org/Bewustzijns-Besturings-Model/Nature-of-emotions.htm>

The Nature of Emotions Webページ翻訳結果 <https://translate.weblio.jp/web/english?lp=&url=http%3A%2F%2Fwww.fractal.org%2FBewustzijns-Besturings-Model%2FNature-of-emotions.htm&sentenceStyle=spoken>

図版・表

図1 筆者友人撮影

図2 <http://sokids.org/ja/programs/beads-courage/>

図3 2018年6月筆者撮影

図4 2018年8月筆者撮影

図5 2018年8月筆者撮影

図6 2019年3月筆者撮影

図7 <http://www.fractal.org/Bewustzijns-Besturings-Model/Nature-of-emotions.htm>

図8 2020年1月筆者撮影

図9 2020年1月筆者撮影

図10 2020年1月筆者撮影

図11 2020年1月筆者撮影

図12 2020年1月筆者撮影

図13 2020年1月筆者撮影

図13 2020年1月筆者撮影

図14 2020年1月筆者撮影

図15 2020年1月筆者撮影

図16 2020年1月筆者撮影